

では**第二テモテへの手紙 4 章**をお開き下さい。パウロの書いた書簡、新約聖書の中には 13 ありますけれども、その 13 の中の最後のもの。つまりパウロが死ぬ直前に書いた、絶筆となったのがこの**テモテへの手紙の第二**であります。パウロの遺言と言って良いと思います。その最後の手紙の中の最終章、それが**4 章**であります。人が死ぬ前に言い残すこと。それは重いわけです。どうしてもこれだけは伝えておきたい。これだけはしっかりと心に刻んでもらいたい。これだけは忘れないでもらいたい。非常に重要なメッセージです。これをパウロは自らの後継者であり、我が子と呼んで愛してやまなかった若い牧師テモテに託すわけです。テモテはパウロの後を継いでエペソの教会の牧師をしておりました。そのテモテに最後の言葉を言い残すわけです。おそらくこの直後、1 年も経たないうちにパウロは狂人皇帝ネロによって断首刑となって世を去るようになります。その最後をもう悟っているわけです。いまは囚われの身でローマの獄中におります。獄中からこの手紙をエペソの教会の牧師であるテモテに宛てているわけであります。

早速**1 節**から見て参りますので、目で追って頂きたいと思います。『**神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現われとその御国を思って、私はおごそかに命じます。**』最終章の冒頭の言葉としては、非常に相応しい重みのある言葉です。厳粛な気持ちにさせられます。神の御前、そしてイエス・キリストの御前と。神とイエス・キリストは同列のお方として三位一体の神がここに現れています。父なる神と子なる神イエス・キリスト、同列です。優劣はありません。聖霊なる神はここにはもちろん言葉としては言及されておりませんが、聖霊なる神がパウロのうちに働き、そしてパウロの手を通して靈感によってこの言葉が刻まれているわけです。ですから三位一体の神はここに現れているわけです。聖霊は常にイエスのものを受けて、イエスのものを現す。また聖霊はイエスの栄光を現すという働きをしますから、あまり前面には出ないわけです。いつも聖霊は控えめであります。

で、その神の御前とイエス・キリストの御前。写本によりましてはイエス・キリストの前に『主』を含めている写本があります。主イエス・キリストの御前でと。公認本文では『主』という言葉を含めております。ですから主イエス・キリストと言えどもっとはっきりとイエスが主なる神であるということが明確になります。

で、その神と主イエス・キリストが裁き主である、審判者であるということが真っ先に強調されています。これからパウロは皇帝ネロによって死刑を言い渡されて、首をはねられて死んでいくわけですが、周囲から見ればパウロは皇帝によって裁かれる、そして殺されるというふうになされてしまうと思うんですが、しかしパウロはさらにネロの向こう側にいる、その背後におられる、さらにその上におられる主の主、王の王である裁き主を思っているわけです。すべてはこの裁き主が裁かれること。皇帝ネロが私の首をはねるのもまた神の許しによって行われることである。ですからこれはすべて神のご計画のうちの 1 つである。神の許しなくしていくらローマの最高権威者皇帝ネロであっても何も出来ないんだということ。ですから一見何か悲しい、寂しい、また恐ろしい思いをして殺されていくかのように見えてしまうかもしれませんが、パウロの視点で見ると、いやそうではないんだと。これは全て主が許されていること。これが最善なんだということ。自分はこの神の裁きの手の中にある。御心の内にあるんだということを実感しているわけです。ですからパウロは一切死というものを恐れていません。クリスチャンも皆同じであります。自分の身にいろんなことが起こります。事件もあれば、災いもあれば、いろんな災難・事故もあります。不幸と思えるもの、悲劇と見えてしまうもの。でもそれらは全て神の許しなくしては起きないということをいつも意識して、それを認めなくてははいけません。そうすれば何も恐れる必要は

ありません。怖がる必要はありません。「どうしてだろうか。なぜこんなことが。」はっきりとその時には理由が分からないかもしれませんが、ひとつだけ分かっていることは、それは主権者である神が全てご存じで、すべてを許して、そしてこれは最善なこととして必ず後々に用いられて行くんだということ。今は分からなくても、神を信頼するわけです。ひとり子イエス・キリストを与えるほどに愛しておられるその父なる神が許されていることだから。そこは揺るがない確信となって皆さんを安心させてくれると思います。それが一体どのように働いて、どのような結果をもたらすのか。現状を見る限り全然それが皆目見当もつかない。だから納得がいかなかったり、理由探しをして右往左往してしまうかもしれませんし、パニックになってしまうかもしれませんが、理由は分からなくても目的は分かっているわけです。これは神の栄光のためになる。そしてこれは必ずこの私をイエス・キリストの似姿に変えるものとなっていく。これだけは確信を持って言えることでもあります。神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益として下さることを、私たちは知っているんです。これは知っているんです。今読み上げたのはローマ 8:28 ですが、29 節その次の節にはその益となるということが具体的にどういう益なのかということが書いてあります。(『なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。』) 端的に言うとその益とは、単に「災い転じて福となす」という程度の意味ではありません。そうではなくてその災いは、私たちひとりひとりを御子と同じかたちに、同じ姿に変えるものとなる。これが究極の益です。そのことをまず初めに皆さんにも押さえて頂きたいと思います。ですから何があらうと、状況がどうなるらうと、境遇がどうであらうと、神がすべてを正しくお裁きになる。主が私たちの主である限り、私たちは何も恐れる必要がない。ネロが主ではないんです。ローマの時代、ネロは主であると人々はネロを礼拝していたわけです。“クーリオス”というのがギリシャ語で『主』のことです。それは絶対的な最高権威者を指す言葉です。で、それは神をも表す言葉ですから、「ネロはクーリオス、ネロは主である。」と言うのは、まさにネロに対する信仰告白であったわけです。ところがクリスチャンたちは、ネロではなくて「イエスこそが主である。イエスがクーリオスであると。」そのように言う者たちを捕らえてはネロは迫害し、恐ろしいおぞましい迫害を加えたわけです。生きたまま猛獣の餌にしたり、生きたまま火あぶりにしたり、たくさんのクリスチャンたちはネロの魔の手によって殉教していったわけでありました。でも、イエスこそがクーリオスである。全知全能の神であり、天地万物を造られた、生ける真の創造者であるということ。このお方こそがジャッジであると。ですから最後にジャッジされる方、最後に裁かれる方がどなたなのか。この方に任せれば安心です。理不尽な扱いを受けたとしてもです。不条理だと思ってもです。最後に裁くのは誰なのか。忘れないで欲しいと思います。

で、今回は 3 章のところ特に 16、17 節のところ聖書がすべて神の靈感による言葉、ひとつひとつは神の息吹によって書かれた権威ある言葉だということを強調して説明したわけですが、でも中には神の言葉を絶対的な権威あるものとして受け止めない人たちもあるわけです。「すべてが神の靈感によって書かれたのではなく、部分的に靈感によって書かれたもの。その他は人間が後々に手を加えて編纂して、そして作り上げた文書である。神話も含めてある。寓話も含めてあると。ですから聖書は絶対的な最終権威とはならないんだと。」そういう立場の人もあるという話をしました。人間が神の言葉である聖書を裁いているんです。ジャッジしているんです。ですからすべて神の靈感によって書かれていないと見なしている人たち、そういう立場の人を自由主義神学の人たち、高等批評の人たちというふうに言いますが、リベラルと言います。彼らは聖書を拠り所としてはいないんです。聖書によってすべてを判断する絶対的な基準としていないので、自分が常に主であるわけです。自分がどう思うか、どう感じるか。聖書にいちいち求めなくても、自分の感性、自分の感覚、自分の主義、自分の信念、聖書は参考までと言う程度の捉え方である人たち、彼らは聖書を自ら裁いているわけです。これは恐ろしいことです。でもそうではな

くて、聖書が私たちが裁くんだということも覚えて頂きたいと思います。あなたにとって聖書は絶対的權威のある神の言葉として受け止められているでしょうか。拠り所となっているでしょうか。これがあなたにとってのすべての判断基準、価値基準のもとになっているでしょうか。聖書は神の言葉、真理の言葉です。真理は1つしかありません。ですから聖書に反することはすべて真理ではないということです。聖書こそが絶対的な權威である以上、私たちはこれに従うべきであります。聖書に反することをするという事は、聖書に逆らうという意味で、それは神の權威を蹂躪するということ、侵害するということ、認めないということ、逆らうということです。その神の言葉の重みも是非知って頂きたいと思います。最後の審判者の言葉、それが聖書の言葉です。神が裁くという時、それは聖書の言葉が裁くという意味でもあります。それほど神の言葉は權威があつて、重いということです。これ以上に重い言葉は他には存在しません。これ以上に大切にしないといけない言葉は他にありません。誰が何と言おうと、ネロがなんと言おうと、偉い人が何と言おうと、時の権力者が何と言おうと、あなたの上司が何と言おうと、誰が何と言おうと、私たちは神の言葉に従うべきであります。そして私たちは神の言葉を信じる者として、この權威ある言葉を語り継いでいかなければなりません。それが、パウロがテモテに最後に強調してどうしても伝えなかったことであります。『**16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。**<sup>17</sup>それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。』神の人テモテ、そしてすべて神の言葉を額面通り、文字通り信じ受け入れている人は全員神の人として、テモテに倣うべきです。

そしてもう一度テキストの**4:1**に目を戻して頂いて、『**神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、**(これ以上權威のない人です。生殺与奪の權威を持っている。人を生かすも殺すもこの方の判断で全て決まるわけですが、)、**その現われとその御国を思って、私はおごそかに命じます。』**と。「現われ」という言葉は、主の現われのことです。**8節**にも使われています。「**主の現われを慕っている者には**」とあります。クリスチャンにとって主の現われというのは、携挙のことを言います。または空中再臨とも言います。ラブチャーのことです。その時に私たちはキリストの裁きの御座の前に立つわけです。「クリスチャンも死んだら裁かれるんですか。怖いです。どうしよう。やばい。」と思う人もあるかもしれませんが、誤解しないで下さい。皆さんはよく知っていると思いますけれども、クリスチャンの受ける裁きというのは、これは罪定めめの裁きではありません。もう全て罪の罰はイエス・キリストが**2000**年前に十字架で負って下さったので、私たちはもう二度と地獄に落ちる心配をする必要もありませんし、また罪悪感・罪責感を持つ必要もありません。罰せられるという恐怖感、「祟りがあるんじゃないか。罰が当たるんじゃないか。」そういう思いを一切抱く必要がないわけです。すべてイエスが負って下さったので、安心して罪の赦しを受けて、解放感を持って、感謝を持って生きればいいわけです。ですからここで言うキリストの御座の裁きというのは、そのような罪定めめの裁きではなくて、それはもうキリストを信じる者は受けないわけです。ただしここでの裁きというのは、報いを受けるための裁きです。**第二コリント 5:10**にその言葉が使われていますから参考までにお読みしたいと思います。『**なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。』**罪定めめの裁きではなくて、報いを受けるための裁きです。で、「御座」という言葉。これは「**キリストのさばきの座**」というところにあります。この「**座**」というのはギリシャ語で“**ペーマ**”と言います。この“**ペーマ**”という言葉は、オリンピックの表彰台を指す言葉です。ですから法廷を指す言葉ではなくて、表彰台を指す言葉です。その表彰台において、ルールに従ってしっかりと競技を行い、そしてそこで勝ち得た者は報いを受けるわけです。オリンピックの表彰台を思い出して下さい。現代であればメダルを受けるわけです。パウロの時代もオリンピックは有名でした。時折パウロはその書簡の中でオリンピックのアスリートのことなども引き合いに出しながら、信仰の説明もしてい

るわけですが、その中で報いを受ける、これは今日のテキスト中でも栄冠という言葉で表現されています。後でそこは詳しく説明したいと思います。8 節に「義の栄冠」という言葉が使われています。古代オリンピックではメダルを使わずに冠を使ったわけです。月桂樹の冠のようなもので、まさにそれがメダルに相当したわけです。私たちクリスチャンもこの地上において神の栄光のために生きたならば、キリストの御名の故に行った事は全てそれは審判者によってジャッジされ、評価され、そしてそれに対しての報いが、それに対しての冠が、若しくはメダルというものが授与されるわけです。で、それが天において永遠にどれほどの価値があるものかということの後を説明したいと思います。それが主の現われの時、つまり携挙の際に起こることです。携挙の際、生きている者は地上から引き上げられます。死んだ者は、世を先に去った者はその前に新しい体、朽ちることのない栄光の体を頂いて主の前に立つわけです。で、私たちもまた朽ちない体を頂いて、共にこのキリストの裁きの座に立つわけです。そしてそれぞれこの地上において行ったこと、自分の考えや肉的な思いでやった事は当然のことながらカウントされません。永遠に価値のあるもののために地上生涯を用いた者たち、持てるものをすべて永遠の価値のあるもののために投資した者たち、その彼らは表彰台において報われるわけです。第一コリント 3 章、そちらにもこのキリストの御座の裁きについて書いてあります。12 節からお読みします。『<sup>12</sup>もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、<sup>13</sup> 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。<sup>14</sup> もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。<sup>15</sup> もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。』私たちの人生の土台、それは 11 節（『<sup>11</sup>というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることは出来ないからです。その土台とはイエス・キリストです。』）を見て頂くと、イエス・キリストであるべきですけれども、そのイエス・キリストを土台とし、<sup>もとい</sup>基として人生を築き上げるわけです。イエスの名によってなすこと、イエスの御名によって生きること、神の栄光のために働くこと、それは金銀宝石、火によっても焼き尽くされることのない永遠に残るものとして、報いにそれが算定されていくわけです。ところが木草わらは、火によっても焼かれれば灰になってしまいます。つまり永遠に残らないものです。クリスチャンでありながらも、永遠に残るものと、永遠に残らないもののためにそれぞれここで振り分けられて、そして永遠に残るものだけがこの審判者によって評価され、それに対する報いが冠として与えられるわけです。それは天の宝とも言えるでしょうし、天における報いとも言われるものであります。どれほどの冠を私たちは頂けるのでしょうか。皆さんもそれぞれ今までの人生を振り返ってみて下さい。クリスチャン人生の中で、永遠に残るもののために時間を使ってきたでしょうか。永遠に残らないもののために、時間や労力やお金を注ぎ込んでしまった。それは全くの無駄になります。ドブにカネを捨てるようなものであります。ですからそのことも覚えて頂いて、まだまだ先があると思ったら大間違いです。今晚が地上最後の日かもしれません。その時に主の前に私たちは立ちます。キリストの御座の裁きでどうでしょうか。「こんなことだったらあの時もっとこうしておけば良かった。ああしておけば良かった。」後悔先に立たずであります。その時にはもう遅いんです。でも、主の憐れみと恵みによってまだこの時間が与えられております。手遅れという事はありません。少なくとも今生きているわけですから。この時間においても私たちは永遠のために自分を捧げることが出来ます。

で、御国も必ずやってくるということ。テキストに戻って頂いて『その現われとその御国を思って』とあります。天国のことです。御国とは文字通りは“バシユレイヤ”。ギリシャ語で言う“バシユレイヤ”とは、神の支配のことです。神の支配を思う。皇帝ネロによって支配されているのではない。その背後におられる主の主、王の王が支配しているんだと。それを思って毎日生きるわけです。「もうお手上げです。コントロール不能です。もう八方塞がりです。万策尽きました。もうどうにもならない。にっちもさっちも

いかない。何の助けもなければ、何の解決もない。」そうではありません。主はどかっとその王座に着いておられます。主は一切動じていないんです。主権者が誰なのか、是非皆さんも覚えて頂きたいと思います。御国を思って、永遠の世界です。この世は尽きてしまいます。日本という国もなくなるんです。この地球もなくなるわけです。なくならないもののために私たちは生きなくてはなりません。永遠の価値のあるもののために、人生をもっと用いていく必要があります。

で、『おごそかに命じます。』という言葉は**第二テモテ 2:14**にも使われています。『これらのことを人々に思い出させなさい。そして何の益にもならず、聞いている人々を滅ぼすことになるような、ことばについての論争などしないように、神の御前できびしく命じなさい。』「神の御前できびしく命じる」ということは、それは「おごそかに命じる」という原語と全く同じであります。ですから**第二テモテ 4:1**を「きびしく命じます」と訳しても差し支えないわけです。パウロがどういう思いで語っているのかは、この言葉遣いで分かります。おごそかに、きびしく命じると。

で、その具体的な命令、それは**2節**。どれほどこれが重要な命令なのかということを考えて頂きたいと思います。どれほどこれが重い命令なのかということを受け止めて頂きたいと思います。『みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。』「みことばを宣べ伝えなさい。」これがパウロがテモテに対しておごそかに命じたこと、きびしく命じたことです。みことばはもちろん聖書の言葉ですが、これを宣べ伝えなさいと言われてます。「宣べ伝える。」という言葉の原語は、“ケルツソー”というギリシャ語です。“ケルツソー”という言葉は、王の布告を伝えるその伝令官、布告者のことです。この“ケルツソー”の直訳は、王の布告者となりなさい。王の伝令となりなさい。王からの勅令を受けて、それを国民に高らかに忠実に語る者。それが王の伝令、布告者です。間違っただけではいけません。もちろん国民の顔色を見ながら、いま伝える時期かどうか、そんなことを考えてもいけないわけです。王が、「これを伝えよ。」と言ったら、額面通り削ることも省略することも許されませんし、付け加えることも許されません。全く内容を変えてしまうなんていうことは、改変してしまうなんていうこと、改ざんしてしまうなんていうことは、絶対に許されないことです。そっくりそのままを国民に権威をもって伝えなさいということ。これは王からの言葉だと。絶対的な支配者からの言葉である。「これを伝えたら不快に思うんじゃないか。こんなことを相手に言ったら嫌われるんじゃないか。馬鹿にされるんじゃないか。噛み付いてくるんじゃないか。」そんなことを王の伝令官は恐れませぬし、一切考慮しません。誰に対してだろうと、その言葉を信じようと信じまいと、関係なく大胆に宣言するんです。それが“ケルツソー”という言葉です。私たちクリスチャンは皆、神の国の、天国の代表としてこの世に遣わされているわけです。ですから時折私たちは、キリストの使節と呼ばれていたり、また神の国の大使であるというふうによく言われるわけです。パウロがそのように表現しています。それぞれ私たちは神の国に於いて、天に国籍を持つ者として、天国人として生きているわけですが、その天国人は天国を代表する者としてこの世に遣わされているということです。神の国とはどういうところなのか。神の国の王が、どのような王であるのかを証するために。そしてその王からのメッセージを伝えるためにこの世に遣わされているわけです。ですからクリスチャンになってもすぐには天国には引き上げられません。天国に入れてもらえるわけじゃなくて、その前に地上に残されているその意味というのがある。その使命、役割というものがあるわけです。それがこの「宣べ伝える」ということです。御言葉を宣べ伝える。最近こんなニュースがありました。「広島・長崎の式典、独善的でうんざり。イスラエル高官」という見出しのニュース。皆さんも聞いていると思います。広島と長崎で行われた平和式典について、イスラエル政府高官が自らの Facebook に「独善的な式典にはうんざりだ。広島と長崎の原爆は日本の侵略行為の報いだ。」と書き込んでいたと。で、現地の日本大使館は 15 日までにイスラエル外務省に抗議したということです。で、その高官というのは広報離散民省元幹部のダニエル・シーマン氏で

す。そのシーマン氏は、「日本の帝国主義や大量虐殺の犠牲になった中国人や韓国人、フィリピン人などを追悼すべきだ。」とも書いた。Facebook に書いたわけです。書き込みは既に削除されている。シーマン氏は首相府のインターネット広報戦略の責任者への起用が検討されていたが、現在停職処分になっていると言う。で、首相府は「書き込みは容認できず、政府の立場を表したものではない。」と指摘。シーマン氏に嚴重注意し、書き込みの即時停止を命じたことを明らかにしたと。駐日イスラエル大使館は16日に声明を出し、シーマン氏は多くの人の心情を傷つけたと陳謝したという、そういう記事であります。イスラエルという国を代表して語ったわけではない。このシーマン氏の Facebook に載せたその書き込みは、イスラエルの国を代表する公式見解ではないと、言っているわけです。まあ、そのニュースを聞いた時私は思いました。クリスチャンは、じゃあ果たして神の国を代表して、神の国の公式見解を常に述べているだろうか。Facebook に何を書き込んでいるだろうか。普段人にどのように語っているだろうか。それはあなたの独自の、身勝手な見解なのか、自分の主義主張に基づく、自分の独自の思想に基づく発言なのか、意見なのか。それともそれは聖書に書かれている神の見解なのか。クリスチャンはこの地上に置かれている間、常に考えなくてははいけません。意識しなくてははいけません。私たちは天国人であるということ。そして私たちは誰を代表しているのか。日本人である前に、私たちはクリスチャンなんです。ですから日本人としてどうのこうの、イスラエル人としてどうのこうの、中国人として韓国人としてフィリピン人として、アメリカ人としてどうのこうのではなくて、その前に私たちはクリスチャンとしてどうなのか。これは自分の意見なのか、それともこの国の意見なのか。この現政権の意見なのか。いつもそのことを考えなくてははいけません。そうでないと私たちもこのシーマンさんと同じようなことをしてしまいます。それは神の国を代表した意見ではないんだと。とがめられるわけです。停職処分です。クリスチャンとしては相応しくないわけです。ですからよくよく私たちも自分の語ることに注意をしないてはいけません。そこに神の国を代表する見解を記していないならば、大変なことになります。もちろんそのような見解と言うのは、木や草やワラのようなものですから、永遠に残らない役に立たないものですから、何を言たってそんなものは価値のないものであります。むしろ私たちは永遠に価値のある言葉を語るべきです。それがクリスチャンの立場であります。

日本語の注解書にこのようなコメントがありましたので、よくまとまっていると思いましたから、敢えて引用して紹介したいと思います。「**教会が宣べ伝え、私たちキリスト者が携えていく福音は、単なる思想や体験談、人生訓のようなものではない。それはどこまでも神の御言葉でなければならないのであると。**」  
私たちが宣べ伝えるのは自分の思想、体験談、人生訓ではないわけです。そうであってははいけないわけです。そうである以上、それは神の国を代表する見解ではありません。自分の独自の歴史認識によるもの、右翼だとか左翼が言うような話、哲学的な思想も心理学的な見解も、それが聖書と違うならば、それは神の国を代表していない意見、見解、考え、思想ということで、神の国ではそれは認められないわけです。とがめられるものであります。私たちはどこまでも神の御言葉を語り告げなければならないということ。それが王の伝令としての職務であります。王の伝令は、自分の言葉など一切口にしてはいけないんです。王の伝令は、王の述べたことのみを。余計な事は言わないし、省いてもいけない。自分の考えをそこに合わせてもいけない。独自の解釈をして、それを噛み砕いて言ってもいけないわけです。正しく伝えなければいけません。それが私たちの務めです。**第二テモテ 3:15** を振り返って頂きたいと思います。『また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。(テモテのことです。) **聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることが出来るのです。**』聖書は知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることが出来る。そのようなパワフルな言葉なんです。知恵を与えて救いをもたらすことの出来る生きた力ある言葉なんです。ですからこの御言葉の力を信じて、余計な事は含めずに、ストレートに御言葉を伝えて頂きたいと思います。これは MGF のホームペ

ージに載せている言葉です。『御言葉で語る』という見出しをつけています。ちょっと聞いて頂きたいと思います。「まだイエスを信じたばかりの人が無神論者の元へ行って伝道したが当然のことながら拒否された。「神などいないのですよ。」「でも聖書では信じないものは罪に定められると書いてあります。」「神など私は信じていません。」「ええ。それでも信じないものは罪に定められると聖書に書いてあります。」怒った無神論者はそのまま帰ってしまった。まともな伝道が出来なかったと失望したクリスチャンはどうしたらいいか分からないので、神に祈った。「神様、あの人をあなたが救って下さい。」家に帰ってベッドに入った無神論者はなかなか寝付くことが出来なかった。「信じないものは罪に定められる。」という言葉が耳から離れないのだ。ついに彼はたまりかねて祈りはじめた。「神様、もしあなたがおられるなら、私をお救い下さい。私に、あなたの救い主だと言われるイエス様を信じさせて下さい。」神はその祈りを聞いてくださり、無神論者は救われたのであった。」御言葉の、御言葉そのものの力を皆さんも信じて頂きたいと思います。過小評価しないで下さい。「この人に聖書という言葉なんて言ったって、どうせ分かりっこないし、この人は頑<sup>かたく</sup>なで無神論者と自称しているくらいだから、いくら神の言葉を語ったってそんなものは信じないと一蹴されるだけだ。だから神の言葉なんて却って言わない方が良くかもしれない。逆効果かもしれない。」そう思って私たちは御言葉を宣べ伝えることを躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>するかもしれませんが、それにはそれほどの効果がないと思ってしまうかもしれないし、逆効果とすら思ってしまうかもしれません。でも、そうではないということを知って頂きたいと思います。『聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることが出来る』と。これは聖書が約束していることです。あなたが人を救うのではありません。神が人を救うんです。その際に御言葉を使うわけです。『信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。』(ローマ 10 : 17) とあります。信じないと言う人、その人たちが信じるようになるためには、神の言葉、キリストについての言葉を語らなければ、信仰は始まらないわけです。信じてもらいたいと願うならば、あなたは神の御言葉を語らなければいけません。語り続けなくてはなりません。何度となく拒まれてもです。またヘブル 4 : 12 には『神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することが出来ます。』神の言葉がその人の心を分析してくれます。そして本当に自分が罪ある者で、このままでは罪のうちに死ぬだけだ、滅びるだけだ。自分にはこの罪からの救いが必要だ。罪からの救い主が私には必要だと。聖霊によって書かれた神の言葉が、その人の心に植え付けられると、聖霊ご自身が働いて下さるわけです。イザヤ 55 : 11 には『そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。』神の言葉は無駄には帰って来ないんです。ですから神の言葉など語っても無駄だなんて、絶対に思わないで下さい。口頭で語ることも1つですけれども、神の御言葉を書き送るのもまた1つです。ハガキに書くとか。もちろん聖書そのものをプレゼントする。ギデオンの聖書をプレゼントしたり、この教会にもいろいろなギフト用の小冊子があれば、コンサイス・バイブルといったものもあります。神の言葉がそこに含まれているもの、それをプレゼントするということです。いろんな形、いろんな媒体、いろんな方法で神の言葉をとにかく宣べ伝えるという事。それは時が良くても悪くてもです。時が良くても悪くても。私たちがタイミングだとかを考える必要は無いわけです。今語るべきか、語るべきでないか、迷う必要はないと言うことです。時が良くても悪くてもです。今はちょっと語るべきじゃないんじゃないかと。それではky(空気読めない)になっちゃうと思うかもしれませんが、御言葉を語る際には空気など読む必要は全くありません。どう思われたって良いわけです。『時が良くても悪くても』という直訳は、『良い機会でも、機会がなくても』です。よい機会でも、機会がなくても。機会という言葉は、chance とか opportunity また英語の聖書では season 。シーズンだろうとシーズンオフだろうと関係ないと言うことです。で、良い機会というのは分かります。もちろんそれは絶好の機会として語るべきですけれども、機会

がない時でもと。これはどういう意味でしょうか。機会がない時、その時にも御言葉を語れと言っているわけですから、つまり機会をあなたが作れと言っているわけです。悪い機会というのは、これは意識です。直訳ではありません。機会がなくても。とても御言葉を語るような雰囲気じゃないし、今はそんな場じゃないと。私たちは勝手にそういう機会じゃないと思うわけです。相手が何か霊的な事柄に興味を持ち始めてくれたら、キリスト教だとか聖書だとか信仰について色々興味を持ってくれたら、良い機会だ。今語るべきだと。それもそうです。でも、相手が全く関心を示さず、むしろ無関心でもあなたが機会を作れと言っているんです。そこまでしなさいというのが、パウロが最後にテモテに命じたことです。もしテモテがこの命令に対して不忠実だったらどうなったでしょうか。パウロ亡き後テモテがパウロの後を受け継いで引き継いだわけです。パウロが死んじゃってパウロの命令が実行されなかったら、ひょっとしたら今日の私たちは救われていなかったかも知れないんです。テモテがパウロの言う通りに命令を実行してくれたから、世界中に御言葉が宣べ伝えられ伝搬し、そしてこのイスラエルから見たら極東、世界の果てにまで神の言葉が宣べ伝えられて、私たちにも届けられ、そして私たちはこの御言葉によって救われたわけです。時が良くても悪くても。良い機会があっても、機会が全くなくても。それでも先人たちはこの神の命令に忠実に従って、実行してくれてきたんです。そのおかげで今の私があると思うならば、あなたもそれを引き継ぐべきです。受け継ぐべきです。あなたにもこの命令が今日この瞬間与えられているということをしっかりと受け止めて頂きたいと思います。あなたがこれを実行しなければ、救われるべき人は救われないのかもしれない。あなたの愛する者たち、家族も救われないかもしれない。そのことを是非考えて頂きたいと思います。あるクリスチャンを通してあなたはイエス・キリストに出会ったかもしれません。もしその人が神の言葉を語るのをはばかり、遠慮してしまって、私たちの顔色を見ながら、私たちに嫌われないように、「そんなことを言ったら不快に思うかもしれない。罪だとか、悔い改めだとか、地獄だとか、裁きだとか、そんなことを言うと嫌な思いをするかもしれないから、だからこの人には神の言葉は敢えてストレートには語らないと。」もしそんなふうにしていたら、私たちはひょっとしたらいつまでも救われていなかったのかもしれませんが。残念ながらこれはアメリカの統計調査の話ですけれども、アメリカの福音主義の、ファンダメンタルの、聖書を文字通り信じているそうした福音派の教会です。その教会では平日に聖書を教えるという平日の集まり、いわゆるバイブル・スタディーは全体の3%の教会しか行っていません。福音主義の教会であっても、たった3%の教会だけが平日に聖書を教えるバイブル・スタディーを行っているということです。神の言葉を、すべて神の靈感によって書かれたものではないと主張するリベラルという人たち、自由主義神学の立場の人たち、高等批評を神学としている人たちは、当然のことながら聖書など教えません。彼らの教会の礼拝に行っても、聖書などほとんど開かれなないわけです。その彼らが、3%の人たちが、それでも聖書を平日教えているという話じゃないんです。そうじゃなくて、すべてこれは神の靈感による言葉であると。額面通り神の言葉として受け止めているという立場の人たちであっても、たった3%の教会だけが平日に聖書を教えているというのが、それがアメリカの現実であります。たった3%です。で、3%以外の人たちでも教会で平日集会をしているんですが、彼らは何をしているかといったら聖書を教えているんじゃないくて、そこではいろいろな人間のニーズに応えるべく、例えば「人間関係で悩んでいます。どうしても情緒が不安定なんです。すぐにブチ切れてしまいます。すぐに自己憐憫に陥ってしまいます。」そういう人たちがどのようにして感情をコントロールしながら、人間関係を円滑にしていくのか。人を赦すことが出来るのか。受け入れることが出来るのかとか。または「結婚で行き詰まっています。子育てで行き詰まっています。または経済難です。どうやったらお金をちゃんと管理出来るのか。すぐに浪費癖があって使ってしまうんですとか。すぐに借金をしてしまうんです。」そうした具体的なニーズに対して応える。そのような集会というのが平日に行われるわけです。聖書そのものが教えられるわけじゃないんです。残念ですけれども、それがアメリカの教会の実態であり、そしてじゃあ日本は



する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。』とされていますが、こういう人々の間にあって、世の終わりのクリスチャンは生きなくてはいけないわけです。それは確かに困難な時代であります。で、それは教会外の人たちを指しているわけではないということを言いました。もちろんそれも含めてですけども、特にこれは教会内の人たちに対してパウロは警告しているわけです。教会の中にも自分を愛する人たちが大勢やってくる。「隣人を自分自身のように愛しなさい。まず自分を愛せない者は隣人を愛せない。」そんなことを言う人たちが現れてくる。聖書に書いていないようなことをあたかもこれが神の言葉であるかのようにまことしやかに教える人たち、耳障りが良いわけです。自分を愛するまでは隣人を愛さなくていいわけですから。都合が良いわけです。「どうして私は人を愛せないのか、人を赦せないのか。それはまず私を愛していないと出来ないことだから。まず私自身を赦さないと、私自身を受け入れないと、私のセルフイメージをどうのこうの。」という話になるわけですが、それは不健全な教えです。心理学の教え、神を抜きにした教えであるということを説明しました。『**3 人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分に都合の良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって**（この「気ままな願い」というのは特に直訳すると「欲望を持って、欲情を持って、情欲を持って」という言葉です。）**次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め**（いろんな牧師だとかクリスチャンの専門家たちを呼んではセミナーを開く。集会を開く。そして）、**4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になると。**』世の終わりは実際に**第一テモテ**の方でも、どういう時代かということ是指摘されていて、**第一テモテ 4:1**ではこのように言われていました。『しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは**惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。**』「信仰から離れる」というのは、言い換えれば「健全な聖書の教えから離れるようになる」ということです。**第一テモテ 1:3**のところにも『ある人たちが**違った教えを説いたり**』とあります。で、**4 節**には『**果てしない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じて下さい。**そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。』そのように書いてあります。また同じことを繰り返しパウロは絶筆となる**第二テモテ**のしかも最終章のところでもそのことを繰り返し釘を刺すようにして述べています。で、この世の終わりとは、まさに今の時代だと私は確信しております。今の時代は、人々が健全な教えに耳を貸そうとしない、だれも聖書をそのままそっくり額面通り神の言葉として信じ受け止め、そして聖書のみを学ぼうということは致しません。アメリカですら、福音派の教会は 3%だけが聖書そのものを学ぶということを平日に行っているわけです。それほどニーズがないというわけです。人気がないということです。平日にバイブル・スタディーなんかしたところで誰も集まって来ないというのが実情なんです。日本も変わらないと思います。こうやって金曜日の午後に御言葉だけを学びに皆さんはやって来られたわけですが、これは日本の教会では尋常じゃない姿です。この田舎でこれほどの人が集まるというのは尋常じゃない状態なんです。尋常でないというのは、良い意味で言っているんですけども、多くの教会では平日にバイブル・スタディー、聖書研究、いろんな呼び方がありますが、聖書だけ教えますと言っても人が集まって来ないんです。この教会では水曜日もやっています。金曜の午後、そして金曜の夜。もちろん日曜日も聖書を教えているわけです。聖書だけでは無味乾燥で、連続講解説教なんかすれば必ず後悔するなんていうことを言う人もいますけれども、でも私はそうは思いません。この教会は連続講解説教、ただ聖書のみを皆さんに伝えています。「そんなことしたら人は集まって来ませんよ。聖書だけを伝えるなんて。退屈になってしまいます。聖書の言葉は理解し難いし、厳しい言葉もいっぱいあります。そんなことをしていたら教会には誰も寄り付きませんよ。」警告してくれる人もあります。でも私は聖書に

従いたいと思います。御言葉を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもです。皆さんも同じことをして、パウロの勧めに、命令に従って頂きたいと思います。これは牧師だけの職務ではありません。この世の終わりの時代にあつて、皆さんもここに置かれているんです。この地上に置かれているんです。何をすべきか。皆さんのこの地上生涯も、キリストの御座の裁きにおいて裁かれるんです。何をしたのか、地上においてあなたがしたことによって、天における永遠の報いが算定されるわけですから、間違いなく評価されるように、間違いなく義の栄冠を頂けるように、私たちは永遠に残るもののためにこの地上生涯を費やすべきであるわけです。

で、テキストに戻って頂いて5節。『しかし、あなたは、どのようなばあいにも慎み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。』“慎み”というのは、“節制”というふうにも訳せます。まさにアスリートが、スポーツ選手が勝つためには食事制限をしたり、また暴飲暴食はもちろんダメですが、けれども、娯楽や快楽それを節制しながら、競技において力を最大限発揮出来るように、勝つためには努力を惜しまない、どんな犠牲も惜しまない。そういう姿を思い描いて頂きたいと思います。それが“慎む”という言葉です。で、次に“困難に耐え”。常に困難はつきものであります。第二テモテ3:12にも『確かに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。』と。クリスチャンとして敬虔に生きたい、キリストのように生きたいと願うだけであなたは迫害を受けると言われているわけです。ですから困難はつきものです。もし困難がないならば、迫害がないならば、あなたは敬虔に生きようとすら願っていないということです。敬虔にまだ生きていなくても、願うだけでも迫害を受けると言われているわけですから、あなたは迫害を受けていないと感じているならば、願ってもいないということです。不敬虔でいいと思っているわけです。クリスチャンなのに、むしろ迫害を恐れて、この世の人たちと調子を合わせて、この世に迎合しながら、この世の長いものに巻かれながら、寄らば大樹の陰というような形で、この世を頼りにしながら、この世で世渡り上手に生きているならば、ひょっとしたらあなたはまだ困難には直面していないかもしれない、迫害を受けていないかもしれない。でも必ず御言葉を時が良くても悪くても宣べ伝えるならば、あなたは困難に直面し、そしてあなたはその困難に負けてはいけません。くじけてはいけません。困難に耐えなさい、と言われていました。「寛容を尽くし」と言われている方は、人間に対して使われる言葉です。「難しい人に対して耐える」という言葉が“寛容”です。この“困難に耐える”の“耐える”は忍耐という言葉でもあります。これは「状況に対して耐える」ということです。人間に対して忍耐を持つということと、状況に対して忍耐を持つ。使い分けられています。困難な状況があるわけです。それでも耐えなさい。で、伝道者として働きなさい。牧師も伝道者と言われていました。皆さんも伝道者です。御言葉を宣べ伝えるものは皆、伝道者です。肩書きなど気にする必要はありません。すべてのクリスチャンはある意味伝道者であり、ある意味宣教師であり、ある意味牧師でもあります。“ある意味”と言ったのは、注意を要するわけですが、ただ牧会的な働きを担うわけです。御言葉によって人々を養う。若いクリスチャンを育てるのも、私たちは職務として与えられています。パウロがテモテに対してそうしたように。また若い人たちも御言葉を宣べ伝えて、伝道者としての働きを担うべきです。『自分の務めを十分に果たしなさい。』「務め」という言葉は、英語の聖書では“ミニストリー”と訳されています。ですからこれが教会用語となっている“ミニストリー”自分の務めを十分に果たしなさい。ミニストリー、あなたにも与えられています。あなたのミニストリー。“あなたの”と言っても、神があなたに与えるところのミニストリーということですが、それを十分に果たしなさい。同じ言葉“果たしなさい”というのは17節にも使われています。そこでは『それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、』その“余すところなく”と同じ言葉です。ですから、「自分の務めを余すところなく果たしなさい。全うしなさいと。中途半端ではいけないということです。余すところなく。適当じゃダメだということです。全うしなさい。途中で投げ出してもいけない。私たちは一大決心をして、「これからは私は時が良くても悪

くても御言葉を宣べ伝えます。」早速今晚から家族に対して聖書の言葉をシェアする。または電話とか手紙を書いて、御言葉そのものをシェアする。友達や同僚に対して。でも、最初だけで、三日坊主で、もう 3 日過ぎたらやめてしまう。それは果たしている事にはならないわけです。十分に果たさない。全うする、そこには継続が含まれているわけです。やめちゃいけない。途中で投げ出してもいけない。余すところなくです。

で、6 節。『私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。』パウロは自分の死期が近いということを知っていました。「注ぎの供え物となる」これは旧約聖書中で生贄の 1 つです。穀物の生贄と共にぶどう酒を注ぐという「注ぎの供え物、生贄」というものがあるわけです。同じ言葉がピリピリ 2:17 に使われています。パウロの言葉です。『たとい私が、あなたがたの信仰の供え物と礼拝とともに、注ぎの供え物となっても、私は喜びます。あなたがたすべてとともに喜びます。』まさにぶどう酒が注がれるように、パウロの血が注がれるわけです。殉教するわけです。でもそれは神への生贄となると。パウロはローマ 12:1 でもこう言っています。『そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。』と。私たちの体は、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物でないといけないわけです。この体をもって神に礼拝を捧げる。この体をもって神に栄光を表す。最後の最後まで、この血がすべて神の栄光を表すために注ぎ尽くされるまで、最後の一息まで。それが全て神への生贄となるように、礼拝となるように。これが、パウロが願ったことで、パウロはまさにその通りになるようにしているわけです。その日がもう近づいているということを知っているわけです。その意味で全てのクリスチャンは、やはり殉教者となるんです。すべてのクリスチャンは無駄死にしない。犬死にもしない。死ぬ時も、審判者がその時だと決められて、私たちの命を取られるだけです。たとえ殺される、たとえ災害で死んでしまう、事故で死ぬ、病気で死ぬ、宣教師としてどこか海外で迫害を受けて殺されるだけが殉教ではないわけです。すべてのクリスチャンは殉教者と言えると思います。もしあなたが最後の一息まで、最後の血の 1 滴までも、主のために注ぎ尽くそうとするならば、使徒の働き 1:8 に『しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの（キリストの）証人となります。』キリストの証人となる、その“証人”という言葉は、「マルトゥース」"martus"というギリシャ語で、英語の"martyr"つまり「殉教者」の語源となっている言葉です。殉教者は真理のためならば命を捨てるというものです。神の言葉は真理です。そのために命を捨てる者、それが証人です。で、それが同時に"martyr"と呼ばれる殉教者です。神の言葉を語りながら死んでいくなれば、全ての人は殉教者です。キリストの証人であります。キリストもそのようにして地上生涯を終えられたからであります。そのような人生に後悔はありません。そのような人生に一片の曇りもありません。最後の一息まで神の言葉を語りながら世を去っていく。たくさんのクリスチャンたちの最後を私も見てきましたが、そのような最後は本当に幸いです。感動的です。決して悲しい、寂しい、恐ろしい、おぞましいようなものではありません。むしろ神々しいものです。本当にその場に居合わせることが出来て、嬉しいし、有り難いし、特権だと思えるぐらいであります。

で、テキストに戻って頂いて 6 節のところに、もう 1 つパウロが死んでいくことを、「世を去る」というふうに表現しております。クリスチャンは皆世を去るんです。死ぬとは言いません。敢えて、世を去ると。死んで消えてなくなっちゃうんじゃないんです。世を去るだけです。去ってどこに行くか。もちろんそれは御国です。天国に行くだけです。クリスチャンの死というのは、天国へ引っ越すだけの話です。ですからクリスチャンが死ぬということは、亡くなるということじゃないんです。「あの人は亡くなりました。」クリスチャンにおいては使わない言葉です。亡くなっていないからです。在るんですから。生きているん

ですから。地上の命が肉体の停止をもって終えただけで、霊も魂も生きているわけですから、ただ引越ただけです。クリスチャンは天国に引越ただけです。世を去って天国に引越ただけ。もっといい所、もっと素晴らしい所に行っただけですから、本来は悲しんではいけないんです。喜ぶべきこと。凱旋帰国したわけです。ただちょっと地上で会えなくなるので、それまで毎日顔を合わせていたのが物理的にこの肉眼で見ることが出来なくなったから、ちょっと寂しいから涙は出るかもしれません。寂しさから。でも、それは打ちひしがれるような悲しみではないわけです。むしろその人はもっと素晴らしい良い所に行って、そこで再会出来るわけですから、喜びでしかないわけです。嬉しいわけです。「良かった、天国に行って。」不適切かもしれませんが、死んで良かったとすら言うわけです。でもそれが真実であります。世を去る。この「去る」という言葉はギリシャ語で「アナルシス」"analysis"と言います。「アナルシス」という言葉は、「動物・家畜を荷車から解放する。くびきを負わせた2頭の牛からくびきを外す。」という言葉です。また、「船が出帆する時に艫綱<sup>ともづな</sup>を解く。船が出航する時に錨を上げる。」という言葉であります。または、「兵士または旅人が出発する際にテントをたたむ。杭を外して、ロープを外して、テントをたたんで出発する。」そういう時に使う言葉が「アナルシス」という言葉です。もう重荷からは解放されるわけです。これからは天に出航するだけです。もう地上の天幕・テントはたたんでいいわけです。この概念について、パウロはコリントの手紙の中でも述べています。「地上の幕屋」という言葉を肉体に当てています。私たちはそのようにして世を去ることが出来るんです。もう何のしがらみもありません。もう肉の思いに駆られたり、肉の弱さに負けて、誘惑に負けて罪を犯すとか。またいろんな枷<sup>かせ</sup>、いろんな限界、もっと御言葉を学びたいのに体が疲れていてすぐに眠ってしまう、そういうこともなくなるわけです。もう思う存分神を礼拝出来る。時間に追われる必要もない。時間に迫られる必要もない。時間なども無い世界に行くわけです。永遠に神をほめたたえることが出来るわけです。家に帰って家族にご飯を作らなきゃとか、家事をしなきゃとか、庭の草を刈らなきゃとか、お年寄りの世話をしなきゃとか、もう帰ることを考えなければいけない、後先のことを考えなければいけない。そういう必要は無いわけです。お腹がすいて集中出来ない、眠くて集中出来ない、そんなこともなくなるわけです。全部から解放される、それが「去る」と言う言葉です。待ち望みたい、待ち遠しいその日であります。すべてから解放されるその日、それがクリスチャンの死というものです。だからといって自殺願望を持つわけではありません。でもパウロは正直に言っています。出来たら私は1秒でも早く天国に行きたい。でも地上に残ることに意義があるし、それも主が求めておられる御心であるならば、板挟みになっている状態ですけれども、それも良しと。生きることもキリスト、死ぬこともまた益であるということです。

で、テキストに戻って頂いて7節。『私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。』勇敢に戦う。兵士としてまたアスリートとして、スポーツ選手としても戦う。先に第二テモテ2章のところでは、「キリスト・イエスの立派な兵士として私と苦しみを共にして下さい。」と、パウロはテモテに兵士という意識を持つようにと言いましたけれども、その後には「競技をする時は規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることが出来ない。」と、第二テモテ2:5でも言っています。ですから兵士として、また競技者・アスリートとして勇敢に戦うんだと。それはもちろん栄冠を求めてということなんです。この戦いにおける分捕り物、戦利品、それがどんなに価値のあるものか。それを期待しつつです。表彰台に立った時にどれほどの報いを受けられるのか、褒賞を受けられるのか。『信仰を守り通しました。』『信仰』という言葉は「真実」というふうにも言い換えることが出来る言葉です。どちらでも翻訳上問題は無いわけです。信仰を守り通しました。真実を守り通しました。誠実に忠実に生きたというふうにも見る事が出来ますし、不健全な信仰に陥ったり、不健全な教えによって惑わされる事なく、健全な信仰をキープ出来ました、というふうにも見る事が出来ます。

で、8節に『今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者で

ある主が、それを私に授けて下さるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けて下さるのです。』義の栄冠、これをパウロは待ち望んでいました。常に義の栄冠を手にする事、頭にかぶせてもらう事を常に意識していました。夢見ていたわけです。オリンピックのアスリートたちは常に金メダルを思い描きながら、表彰台で自分がそれを授与するその姿をイメージしながら、苦しいトレーニングにも耐えているわけです。厳しい節制や、犠牲にも耐えているわけです。「栄冠」という言葉はギリシャ語では「ステファノス」"stephanos"、ステパノと同じ言葉です。パウロがサウロと呼ばれていた時、キリストを信じる男も女も子供も皆縛り上げては逮捕して迫害してまわっていたその時、ステパノの殉教にもパウロは深く関わって、ステパノを殺したわけです。そのステパノの意味はやはり「栄冠、冠」ということです。特にこれは王様が被る冠ではなくて、アスリートが受ける勝利の冠、月桂樹の葉で出来たようなものです。先ほどを触れたように、キリストの御座、ベーマ、ピーマとも言いますが、そこで受けるものだということです。ヤコブ 1:12 (『試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。』) ならびに黙示録 2:10 (『あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけません。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。』) そちらでは「命の冠」というふうに表現されています。また第一ペテロ 5:4 では「しばむことのない栄光の冠」と表現されています。どれも皆同義語であります。オリンピックの勝者が受ける冠、今日でいうところのメダルに相当するものです。で、これをパウロだけが受けるわけではありません。主の現われを慕っている者すべてに用意されているんだと、パウロは言っているわけです。主の現われ、つまり携挙を慕っている者すべてに。このことも皆さんに是非考えて頂きたいと思います。私たちが携挙を、イエス・キリストが現れるのを待ち望んでいるのでしょうか。心待ちにしているのでしょうか。それが今かもしれないとワクワクしながら、花嫁が花婿を迎えに来るのを常に待っているようなそんな心境・心情でイエスの現われを私たちが待ち望んでいるのでしょうか。

で、9 節。『あなたは、何とかして、早く私のところに来てください。』21 節にも『何とかして、冬になる前に来てください。』と繰り返されています。パウロは自分がもう死ぬことは分かっているわけです。死期はもう目前です。寂しかったから早く来て欲しいと、死に目に立ち会ってもらいたいと、そういうふうに思ったのでしょうか。そうではないと思います。もっと実務的な理由です。13 節を見て頂くと、ちょっと先取りしますが『あなたが来る時は、トロアスでカルポのところに残しておいた上着を持って来てください。また、書物を、特に羊皮紙の物を持って来てください。』目的は、なぜ早く来てもらいたいか。それは上着を持って来て欲しい。これから冬になるから、寒くなるから。で、書物をもって来てもらいたい。特に高級な羊皮紙の書物。書物というのは複数形です。ですから 1 冊どころじゃなくて、複数の書物を持って来てもらいたい。何のためか。寂しいからじゃないわけです。実務的な理由です。で、実務的な理由というのはなんなのかというと、獄中においても死ぬ直前であっても聖書を学ぶということです。寒いとなかなか身が入らないわけです。集中出来ないから寒さもちゃんと耐え忍びながら、じっくりと聖書を学ぶことが出来るように。死の直前においても御言葉を学ぶことをパウロは求めたわけです。これだけはやめられない。第二テモテ 2:15 の言葉も思い出して下さい。『あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。』御言葉をまっすぐに、ストレートに、正確に切り分けるというのがその意味だったと、直訳だと言いました。そのためには神に捧げなさい、献身しなさい、御言葉を学ぶために献身しなさいと言っているわけです。これは何も神学生だけに言っているんじゃないやありません。牧師にのみ宛てられている言葉ではありません。すべてのクリスチャンは、御言葉を学ぶためには生涯を捧げなさい、献身しなさい。神

学校に行くことを意味していません。行ってもいいんですけれども。でも、すべてのクリスチャンは御言葉を学ぶために生涯を捧げる。そのために献身する。御言葉を学ぶ事は私たちの職務です。パウロは自らそれを実践したわけです。普通死ぬ直前、そんな聖書を学ぼうなんて思うでしょうか。よく考えてみてください。パウロは新約聖書の大半を書いた人です。私が聖書を書いたのだから、今更他に聖書を学ぶなんて、誰かに教わるなんて。そんな傲慢な態度はパウロには見られません。いつもへりくだって、私も聖書を学ぶ者、私も聖書の学生であると。常に自分自身がバイブルカレッジの生徒であるという意識を持っていたわけです。どこにしようと、何をしようと、聖書を学ぶという姿勢。「忙しいから聖書なんか学ぶ暇はありません。」とあなたは言うかもしれませんが、パウロは獄中においても、死ぬ直前でも、聖書を学んでいたんです。考えさせられます。『自分を神にささげるよう、努め励みなさい。』とは、このレベルを指しているわけです。死ぬ時でも、忙しいからなんていう話は全く言い訳でしかありません。死ぬ直前、苦しくて、しかも獄中といえれば劣悪な環境です。でも、そんな中でも状況がどうであれ、鎖で繋がれていたとしても、それでも聖書を学ぶ。その姿勢です。これが私たちクリスチャンに求められていることです。それがキリストの御座の裁きにおいて表彰されるクリスチャンの姿です。それが後悔しないクリスチャンの姿であります。あの時もっと聖書を学んでおけば良かったと、キリストの御座の裁きにおいて後悔しないために。あんなにチャンスがあったのに、日本一長い説教をしてくれるあの教会に自分には行っていたのに、教会によっては聖書そのものを教えてくれない所がいっぱいあるわけです。もちろんバイブルスタディーや礼拝に来れなくても、普段でもやるべきです。確かに仕事があるかもしれません。確かにいろいろな縛りがあるかもしれません。いろいろな鎖に繋がれているとあなたは言うかもしれませんが。年寄りの面倒を見なきゃいけないんです。小さい子供を抱えているんです。私が仕事をしなければ、家族を養えないんです。いろいろなケースがあると思いますが、でもそれでも御言葉を学ぶということ。言い訳はないということ。是非皆さんにもはっきりと伝えておきたいと思います。厳かに命じておきたいと思います。別に私は皆さんが聖書を学ぼうと学ぶまいと、何も私にはメリットありませんけれども、ただ皆さんには想像もつかないようなメリットがあるということ、そのことは皆さん自覚して頂きたいと思います。輝かしい義の栄冠があなたに用意されているんです。つまらないもののために時間を無為に過ごさないで下さい。くだらないもののために労力やお金を無駄にしないで下さい。

で、10節。『デマスは今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行ってしまう、また、クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマテヤに行ったからです。』この4章にはパウロの知り合い17人以上もの登場人物が現れます。中には非常に親しい友もあれば、中にはデマスのようなパウロを裏切るような者も含まれているわけです。かつてデマスはパウロの同労者、仕事仲間であったわけです。デマスという名前の意味は、「人々を支配する者、人々を治める者、人々の政治家」という意味です。“デマス”というの英語の“デモクラシー”民主主義の語源でもあります。デマスというの政治家というふうにも訳せます。人々を支配する者、統治者ということです。そのデマスは今の世を愛してしまった。世を愛するというの、具体的には第一テモテへの手紙6:10では『金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。』とあります。その前の9節にも『金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。』これは世に含まれているものです。金銭そのものが悪いのではありません。金銭を愛することが、あらゆる悪の根なんです。世を愛するとはまさにそういうことなんです。自分を愛することも世を愛すること。金を愛することも世を愛すること。それは第二テモテ3:2以降に、いろんな現れがある、いろんな形があるということ、世を愛するとはどういうことかということが具体的に書いてあります。デマスはまさにそうなったわけです。見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になってしまったわけです。で、テサロニケに行ってしまった、去ってしまったということです。

で、このデマスという人物については新約聖書に 3 回登場します。まず初めに登場するのはピレモンへの手紙 24 節『私の同労者たちであるマルコ、アリストアルコ、デマス、ルカからもよろしくと書いています。』この記述からデマスはパウロの同労者であることが分かります。マルコやルカの名前は皆さんもよく知っている有名なものです。マルコの福音書を書いたマルコ、ルカの福音書を書いたルカ、この二人は今日のテキストの末尾の方にも出てきます。

で、それから数ヵ月後、ピレモンへの手紙が書かれてから数ヵ月後、コロサイ人への手紙 4 : 14 の中にもデマスの名前を見ることが出来ます。『愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと書いています。』別に何の変哲もない挨拶の言葉と思うかもしれませんが、先ほど読んだピレモンの 24 節のところと比較をして頂くと、デマスは『私の同労者たちであるマルコやルカと同じくデマス』というふうに紹介されています。でも、このコロサイ 4 : 14 では特別そういう表記はありません。ただのデマスです。ルカには『愛する医者』という表記がありますがけれども、デマスには何もありません。ただのデマスです。「デマスがよろしくと書いています。」という表記にとどまっています。

で、この時から、コロサイ 4 : 14 から数年後、それが第二テモテ 4 章です。その数年後のデマスは、今の世を愛して、そしてパウロを見捨ててテサロニケに行ってしまったと言われているわけです。つまりバックスライドしたということです。信仰の後退をしたということです。最初はパウロの同労者としてマルコやルカと同じように徴用されたわけです。大活躍したわけです。スタートは良かったんです。でも、最後がまず良かったんです。パウロと比較して頂きたいと思います。パウロは最後まで勇敢に戦って走り終えて信仰を守り通すということ。最後まで有終の美を飾るということです。それをパウロは実行に移そうとしていますけれども、デマスは、最後は尻切れトンボであるわけです。最後が非常にまずいわけです。

昨日イチローが大きな偉業と呼ばれるものを成し遂げました。日米通算 4,000 安打、もう既に 4,001 安打ともっと増えていくと思うんですけども、大リーグで過去にその 4,000 安打を記録したのは、他に 2 人しかいません。その 2 人に続くようにして 4,000 安打を超えた、歴史に名を刻むような野球選手となったわけですけども、その 4,000 安打を超えている人として 4,256 安打のピートローズという人、そして 4,191 安打のタイカップというその 2 人はもう別格だったわけですけども、この別格の意外なメジャーリーガーに仲間入りを果たしたという大きなニュースが報じられて、いろんなところでも賞賛の声があがったわけですけども。その中で世界でいちばん多い 4,256 安打という記録を残したそのピートローズという人は、「イチローの 4,000 安打は認めない。」という発言もしているわけです。賞賛もしている中で認めないとも言っています。これは新聞に記事が載っているんですけども、「イチロー選手の日米通算 4,000 安打について、私は 4,000 安打を認めないと話した。一方大リーグ 1 年目から結果を出し続けていることについて、日本とアメリカの野球の架け橋になった功績は偉大だと称えた。このピートローズさんは大リーグだけで放った私と、日米通算とは価値が全然違う。大リーグと日本のプロ野球では試合数や移動距離が違い、米国では時差の影響も大きい。その中で 24 年間プレーし首位打者に 3 度輝いた。イチロー選手は大リーグでは 2,722 安打で歴代 59 位、ヒットキングを自称するだけに単純に数字だけが比較されることに疑問を呈した。」と。自らをヒットキングと自称した 4,256 安打を誇るピートローズさん。イチローは認められない。大リーグでは 2,722 安打しか打っていない。歴代 59 位なんか足元にも及ばないだど。日本と同じにしてくれるなということも言っているわけですけども。でも、彼は 1989 年ピートローズは監督在任中に野球賭博に関わったとしてメジャーリーグから永久追放という処分を受けていますで、2013 年現在も球界復帰は叶っていないわけです。世界一の記録を誇るピートローズですけども、でも最後は、これから先はどうなるか分かりませんが、でも彼は野球賭博に関わってしまったが故に、その記録もまさに台無しという状態です。最初は良くても、最後がまずければ、もう台無しなわけです。

デマスも最初は良かったわけです。でも、最後はこの世を愛し、そしてパウロを見捨ててしまったわけ

です。皆さんも考えて下さい。今は良いかもしれませんが、終わりになったらどうでしょうか。デマスとパウロの違い、これは浮き彫りになっています。パウロは最後まで走りぬく。デマスは途中で棄権してしまっただけです。途中で投げだしてしまっただけです。なぜ両者はこんなに大きな違いを生み出したのかというと、それは**8節の『義の栄冠』**、それを意識していたか、意識していなかったか、にかかってくる。パウロの行動規範、パウロのミニストリーの動機の中に、目標の中に常にあったのは、この『義の栄冠』という言葉であり、概念であったわけです。これが目標だったわけです。オリンピックの選手がメダルを目標とするように、パウロもこの義の栄冠を目標としていたわけです。でも、デマスは義の栄冠を目標として働いていたわけではなかったわけです。むしろ今の世を愛するような、現世利益さえ手に入れば、イスカリオテのユダと同じです。イエスの弟子たちの一行に紛れていれば、金入れから常にお金を盗れる、儲けることが出来る。パウロは日常的にこの義の栄冠についてよく考え、よく思いを描きながら、巡らせながら、意識しながら過ごしていたわけです。皆さんはどうでしょうか。義の栄冠を常日ごろから意識しているのでしょうか。これについてよく考えているのでしょうか。天に宝がどれほど積まれているのか、報いがどれほどなのか、考えているのでしょうか。それともこの世の目の前の事ばかりを追いかけて、今さえ良ければそれでいい、この地上生涯さえ楽に暮らせればそれでいい。この世の一時的な価値しかない、つまらない、くだらない、そういうものに重きを置いてしまい、そういうものに執着をし、そういうものに快楽を見出す。であるならば、あなたもデマスになってしまいます。パウロはルステラというところで石打に遭って1回死んでいるんです。で、その後彼は特異な経験をします。自分では生きてままだか死んだ状態かは分からないけれども、でも彼は第3の天、つまりパラダイス、天国にまで引き上げられた。**第二コリント 12章**に書いてあります。“引き上げられた”という言葉は“ハッピーゾー”という言葉で「携挙」という言葉です。**第一テサロニケ 4章**の有名な携挙の教えに使われている「**空中に引き上げられる**」と同じ言葉が**第二コリント 12章**にも使われていて、パウロは携挙されたんです。でも、携挙されたままではなくて戻ってきしまったんです。本当は戻りたくはなかったと思いますが。そこでは彼は天国の現実を見てしまったんです。凄いものを見てしまったんです。で、その天国を見て、これを言葉で表現出来ない。新約聖書の大半を描いた、ギリシャ語を自由に操るあのパウロですら、言葉には表せない、言葉で表現するには許されないという言い方をしています。皆さんは知らないかもしれませんが、古代ギリシャ語を最も流暢に、最も高尚に操ることが出来たのは、パウロという人物なんです。他のどんなギリシャ語の文章を見ても、パウロの書いた物とは比較にならないんです。聖書だから凄いというだけじゃなくて、パウロという人物はギリシャ語をそのように自由に操ることの出来た、パウロの文書は最高の古代文書となっているわけです。で、そんなパウロを持ってすら、その天国の情景、天国の現実を言葉には言い表せない。それはもう口には出すには許されない。表現も許されない。言葉に言い表せないものだ、と言わせている。それほど天国は凄いところ。それを見てしまったパウロは、もうそのことしか思えなくなってしまったわけです。地上にいながらも天国のこと。もうそこに行くわけですから、そのことしか考えられなくなってしまったわけです。『義の栄冠』ただそれが用意されている、もうそこに自分は向かって行くんだと。まっしぐらである、わき目もどこも遠回りなんかしている場合じゃない、無駄な時間を過ごしている場合じゃない、そこにまっしぐら。オリンピックの選手でもメダルを目指している者はわき目もふらずに、とにかくまっしぐらです。で、この栄冠というのは具体的にはどんなものか。あまり時間がないので詳しく話すわけにはいきませんが、それは天国における私たちのポジションとファンクション、その両方を指します。ポジションは立場、ファンクションは機能です。栄冠というものはメダルにも相当するもので、勲章のようなものです。例えばアメリカとか韓国では、戦争において功を上げれば勲章をもらえるわけです。その勲章が何を意味するのか。勲章自体にはそれほど価値はありません。金属と生地で作られているものです。刺繍か何かが入って美しいものかもしれませんが、でもそのもの自体には価値がないわけです。黄金で出

来ているわけではありません。でも、その勲章の象徴するものは価値のあるものです。荣誉、名誉、そして権威もありますし、身分もありますし、そしてまた報奨金も出るでしょう。まあ、そのような勲章と同じように、天において栄冠というのは計り知れない価値を持つわけです。それがあるとないとでは大違いということです。**ルカの福音書 19 章**では、この天の報いを表すためにイエスは、それぞれが報いとして町を治めるようになります。これも後で知らない方は読んで頂きたいと思います。天国において私たちはそれぞれ神様から任せられて、町を治めるような者になる。地上ではしもべとして仕えますけれども、天では支配者として統治するようになる、支配するようになります。小さなことに忠実な者は、大きなものも任されるわけです。この地上で私たちがなした事、それがそのまま天国でカウントされるわけです。それに基づいて、地上で行ったことに基づいて天国生活に大きな影響が及ぶということ、違いが生じるということ。そのことをいつも覚えて頂きたいと思います。クリスチャンは皆天国に行く。それは事実です。でも、天国で差があるということは皆さんはあまり知らないかもしれません。**第一コリント 15 章**というところにも興味深いことが書いてありまして、それぞれの星にも輝きに違いがある、差がある。輝きの強いものもあれば、輝きの弱いものもあるわけです。**ダニエルの 12 章**にもクリスチャンが星にたとえられています。輝く星です。天国において輝く者もあれば、それほど輝いていない者もあるということです。「別に私はそんな義の栄冠には興味ありません。別にそんなものもらえなくたって、天国にさえ行けばいいです。別に私はそんな 10 の町を治めなくたっていいです。別にそんな町の市長になんかなりたくありません。市長になんか興味ありませんよ。別に星になりたいなんて思いません。星の輝きなんか別にあったってなくたってどっちでもいいです。」そのように思う人もあるかもしれませんが、天国でももちろん差があると言っても、その差を持って比較し合ったり、また羨ましがったり、妬み合ったり、歪み合ったり、そねみ合ったり、そういうことは天国ではありません。それぞれが天国において満足するんです。いわば自己満足と言って良いかもしれませんが、これを例えで言うならば、例えば聖餐式に使う小さな杯、それもぶどうジュースによって満たすことが出来ます。でも、酒樽もまたぶどうジュースによって満たすことが出来ます。同じように満たされているんです。同じ満たしですけれども、一目瞭然です。聖餐式のカップを満たすのと、酒樽を満たすのとでは全然違うという事は、誰が見ても明らかです。でもそれぞれは満たされているんです。器が小さければ、小さいだけの満たし。器が大きければ、大きい満たし。それぞれ違いがあるんです。同じ満たしでも、同じ天国でも違いがある。これをいつも思って下さい。小さい子供たちが、大人から見ればつまらないくだらない、何でこんなものが楽しいのか、そういうもので遊びます。でも、子供は満足しています。泥遊びをして、泥まみれになって、大人が見たら「汚いなあ。またお風呂にも入らなきゃいけないし、洗濯もしなきゃいけないし、面倒なことをしてくれているなあ。」と思うかもしれませんが、でも夢中で楽しいです。で、大人も子供と一緒に遊んであげること出来ます。で、子供と遊んでいる間は大人も自分にとって大人としては意味のないことでも、子供が楽しいのであれば付き合い合っあげます。一緒になっておもちゃで遊んであげます。ミニカーで遊んで楽しいと言え、ミニカーと一緒に遊んであげます。でも、子供が遊び終えてから、子供が寝付いてから、再び自分が砂場に行って砂遊びをするとか、子供が寝込んでいる時に密かに子供のおもちゃを取り出してミニカーで夜な夜な遊ぶなんていう人は大人にはいないと思います。子供が楽しくて遊んでいるから、子供に付き合い合っ、子供が満たされているその姿を見るのが嬉しいとして、付き合い合っ遊んでいるだけであって、大人自身はそれを楽しんでるわけじゃないわけです。大人は砂遊び泥遊びなんかしなくても、ミニカー遊びなんかしなくても、本物の家を建てられるわけです。本物の車に乗れるわけです。でも、天国では泥遊びをして満足だというクリスチャンもあれば、ミニカー遊びをして満足だというクリスチャンもあれば、中には天国で豪邸に暮らしながら、天国で本物を味わっている人たちもあるわけです。でも、両者ともそれぞれ満足です。このことを皆さんに考えて頂きたいと思います。この世があなたに与えることの出来る最高のものは金です、ゴー

ルド。でも、天国ではその金・ゴールドはアスファルトと同じ価値しかないんです。コンクリートと同じ価値しかないんです。天の都の道路は黄金で敷かれているわけです。地上でアスファルトを凄くって、一生懸命掘って持ち帰るなんて言う人はいないと思います。天国では黄金なんていうものはアスファルトと同じなんです。でもそんな物を求めながら、一生懸命アスファルトのような程度のを、一生懸命後生大事に抱え込みながら地上生涯を送ろうとする。クリスチャンであっても結果的には天国ではそれだけの満足です。ただ小さな子供のように、道路に寝そべりながら、ゴロゴロしながら楽しい。黄金の上をゴロゴロ回りながら、嬉しい、楽しい、キャーキャー言いながら、寝そべって、這いつくばって、楽しい。子供はそうです。で、大人はそれを見ながら微笑ましいと思うかもしれません。でも自分もそうしようとは思いません。自分がそんなことをしたって、とても楽しめない。天国ではそのような大きな差が生じるということを知って頂きたいと思います。この世で、この世の物を愛しながら、この世の物に執着しながら生きるならば、必ずあの世で後悔します。こんなくだらないもののために私は生きてきたのか。デマスと天国で会うかもしれません。会えないかも分かりませんが。会ったら彼は小さな子供のようにやっているといます。で、あなたをそれを見ながら「かわいそうだなあ。」と思いつつ、「しょうがないな、彼はこの世を愛してしまったから。それが彼の取り分である。それが彼の報いである。」でも、もし私たちが永遠に価値のあるもののために生きるならば、天国を目指して、天国のために、この義の栄冠のために生きるならば、全然違います。

「誰よりも熱心に働いた人は、未来志向の強い人だった。」と C.S.ルイスという人は言っています。またこの C.S.ルイスはこうも言っています。「天国を目指せば、地上も添えられる。だが地上を目指せば、どちらも手に入らない。」これはイエス・キリストが言われたマタイ 6 : 33 と同じことです。『だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。』地上のものも添えて与えられるわけです。天国を目指せば全て手に入れますけれども、地上を目指せば天国も地上のものもどちらも手に入らない。虚しい、惨めだということです。デマスはまさにそちらを選んでしまったわけです。いくら稼いでも、いくら貯めても、いくら名誉を手にしても、名声を手にしても、それはすべて天国には持っていけないわけです。この世限りです。木や草やわらと一緒に灰になるだけです。皆さんは何のために生きているのでしょうか。パウロになるか、デマスになるか、どちらかです。どちらか一方しかありません。天国志向で生きていくのか、地上志向で生きていくのか、どちらかです。永遠のもののために生きるのか、一時的なもののために生きるのか、そのどちらかです。

で、私たちは天国ではミニカー遊びなんかしたくないんです。天国では泥遊びなんかしたくないんです。ここに集まっている全員に私はそのような子供にはなあって欲しくないと思います。クリスチャンは地上で成熟を目指して生きていくべきです。クリスチャンは地上でパウロのように『義の栄冠』を目指して生きていくべきです。「天国にさえ行ければそれでいい。」そんなふうな自己満足、そんなふうな限界を勝手に作ってしまって、「そんなに熱心にならなくていいじゃないか。そんなに足繁く教会に通って、バイブルスタディーなんか行かなくていいじゃないか。別にイエスを信じていればそれでいいじゃないですか。天国に行ければそれでいいじゃないですか。」そういう人がいたら私はいつも心を痛めています。かわいそうだなと思います。この中にいる皆さんは、そうなって欲しくないと思っています。全員が全員大人として天国に凱旋してもらいたいと思います。そこで受けられるすべてのもの、酒樽に満たされるようにすべてエンジョイしてもらいたい。天の栄冠・報いは、天国を最大限エンジョイ出来るその許容量のことを言います。キャパシティーのことを言います。それが大きければ大きいほど、報いが大きいということです。天国をエンジョイ出来るということです。小さければ、おちょこのようなカップを満たすだけです。それでも満足ですが、それまでです。それ以上はないということです。で、これはもう永遠において定められてしまうんです。天国に行ってもそれが増える事はないんです。地上の生涯に全てがかかっている

んです。今が、永遠にかかっているんです。今が、あなたの天国生活の将来を決めるんです。この瞬間が決めるんです。次の瞬間も神の御心ならば、恵みで与えられているならば。でも、その次の瞬間はないのかもしれないんです。死んであなたはキリストの御座の裁きに立つわけです。それ以上は増やせないんです。このキャパシティー、この許容量は、天国では変えられないんです。おちょこのままです。酒樽は酒樽のままです。小さくもならないし、大きくもならない。全部がこの地上生涯にかかっているんです。だから私たちは勇敢に戦わなければいけないんです。困難に耐えなきゃいけないんです。最後の最後まで走り抜かなければいけないんです。諦めてはいけない、投げ出してはいけない、途中で逃げ出してはいけないわけです。デマスのように。

で、テキスト戻って頂きたいと思います。**10 節**、クレスケンスとテトスはパウロを見捨てたわけではありません。そうではなくてクレスケンスはガラテヤに行かなければならなかった。テトスもダルマテヤに行かなくてはならなかった。だからパウロのそばに居られなかったということです。クレスケンスというのは「増大する、成長する」という名前の意味であります。パウロによってガラテヤに派遣されたパウロの同労者です。デマスと違って見捨てたわけじゃありません。この世を愛したわけじゃないです。テトスも皆さんがよく知っている**テトスへの手紙**のあのテトスです。看護師という意味です。我が子テトスと。**テトス 1:4**に言われています。我が子テトスと言われているわけですから、それほど彼はパウロから愛されていた。テモテも我が子と呼ばれています。クレテの教会に問題が生じて、その問題を処理するために、解決するためにパウロが絶対的な信頼を置くテトスを遣わしたわけです。

で、テキストに戻って頂いて **11 節**には『**ルカだけは私とともにおります。**』ルカはパウロの最後の最後まで一緒にいた人物、医者でもありますからパウロは病气持ちでした。常にパウロを手当てして、看護した人物です。テトスの名前も看護師という意味ですけれども、霊的にパウロをサポートしたわけです。肉体的にはルカが、医者の医療技術を持ってサポートしたと思われれます。ルカはギリシャ人です。異邦人です。光を与えるという意味です。**コロサイ 3:14**で先ほどルカのことを見た時には、愛する医者と呼ばれていました。最後の最後までパウロに付き添った人物。最期をみとった人物であります。**ルカの福音書**を書いたあのルカであります。

で、次に出てくるのがマルコです。『**マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務め（ミニストリー）のために役に立つからです。**』マルコという名前の意味は、諸説ありますけれども、ラテン語で防衛という意味。またはハンマーという意味があります。ヨハネ・マルコというのが正式名。ユダヤ人であってヨハネがユダヤ名、マルコがラテン名です。パウロがラテン名で、サウロがヘブル名であるように、ユダヤ人の名前であるように。マルコはユダヤ人です。バルナバという人物のいとこです。バルナバはパウロの恩人であります。煙たがられて、恐れられていた改心したばかりのサウロを弟子たちに引きあわせたのは、バルナバです。バルナバは慰める者という意味です。で、マルコのお母さんはエルサレム教会の中心的人物、最後の晩餐の舞台を提供したのもマルコの母です。ペンテコステのあの出来事もマルコのお母さんの家で起こった出来事。エルサレム教会の母体がマルコのお母さんの家だったということです。ですから超有名人ということですが、でも第一回伝道旅行の際、パウロとバルナバがマルコを伴ったんですけれども、途中で困難があってマルコは離脱してしまいました。デマスと一緒にです。途中で投げだしたわけです。詳しくは**使徒の働き**の **13 章**に書いてあります。で、第二回伝道旅行に出る際にバルナバはいとこのマルコをもう一度連れて行こうとしたんですが、同労者のパウロはそれに反対したんです。「そんな中途半端な若者を連れて行くわけにはいかない。彼は逃げ出したんじゃないか。明確に悔い改めたとも聞いていない。また裏切るかもしれない。」激しい反目がバルナバとパウロの間に起こったとあります。詳しくは**使徒の働き 15 章**に記録されています。で、その激しい反目の結果、バルナバはいとこのマルコを連れてキプロスという自分の故郷に向かいました。一方でパウロはマルコの代わりにシラスという同労者を

見出して、預言者シラスと一緒にシリア・キリキヤという地方に伝道旅行に行ったわけです。で、その後マルコは再びパウロの元に戻ってきたわけです。受け入れてもらっているわけです。両者の関係は回復したということがここでも明らかです。パウロの絶筆、本当に最後の最後にマルコの名前が出て、マルコは役に立つ者だと。完全に関係が回復していることが分かります。喧嘩しても回復するわけです。失敗しても回復されるわけです。もう一度チャンス、セカンドチャンスが与えられる。やり直しが許されるということです。デマスも悔い改めれば、もちろん回復されて、もう一度チャンスが与えられたでしょうけれども、彼はそうしなかったと思われまふ。でも、マルコは違つたんです。彼はへりくだつて、自分の弱さ・過ちを認めて、そしてバルナバはマルコに対してまさにリハビリを行うようにして、個人的に関わつてくれたわけです。一方でパウロはマルコの代わりにシラスを連れて大衆伝道に出発したわけです。バルナバはマルコと1対1のミニストリー、パウロはシラスを連れて大衆伝道。マルコの失敗を通してパウロとバルナバは別の道を歩んだわけです。別のミニストリーを担つて展開していったのですが、どちらが正しいのか。1対1の個人的なプライベートなミニストリー、一人の失敗者つまりいた者を回復させること、それとも大衆を相手に伝道していく事。どつちが正しいのか。両方とも正しいです。1対1も、大衆も同じだということ。バルナバもマルコのために時間を使い、労力を使い、生涯を費やして、マルコが回復出来るように仕えたわけです。その結果マルコは後にパウロだけではなくて、ペテロの片腕としても働きました。ペテロの通訳者として働き、マルコの福音書も書きました。私たちは同じようなことが起こつた時、激しい反目が生じた時、いろいろと迷うかもしれません。パウロが正しいのか、バルナバが正しいのか。どちらも正しいということが、後になって分かる時がやつて来ます。喧嘩別れしたかのように見えるかもしれません。分裂したかのように見えるかもしれませんが、後にそれはそれぞれが歩むべき道だった、方向性は違つたけれども最後には一緒に再び回復して関係を取り戻して、再び共に働ける者に変えられて、チャンスがもう一度与えられていく。これが神の働きであります。

テキストに戻つて頂いて **12 節**、『私はテキコをエペソに遣わしました。』テキコ、彼もアジア州出身の、今日のトルコ出身のパウロの同労者です。**使徒の働き 20 : 4**。また**エペソ 6 : 21~22**にも出てきます。また**コロサイ 4 : 7~9**にも出てきます。テキコ、重要な人物です。名前の意味は、「運命的、宿命的」という意味です。テモテがエペソの牧師だったということを言いましたが、テモテがローマに来る間、空いてしまうわけです。その空きを留守番していたのが、このテキコです。テモテがパウロのもとに行く時、行つている間、テキコがテモテの穴を埋めて留守番をしていて、エペソの教会を世話していたわけです。守つていたわけです。信頼出来る人物です。

で、**13 節**に登場するのは『**トロアスでカルポのところ**に』とあります。カルポというのは人物名、男性名です。意味は果実です。彼のところに上着として書物、おそらくは福音書（自分の書いた手紙は多分要らなかつたと思うので）、旧約聖書。羊皮紙の物。突然のネロによる逮捕によってあまり多くの物は持つていけなかつたと思われまふ。ですから上着とか書物が必要だったわけです。最後の最後まで聖書を学ぶために。

で、**14~15 節**。『<sup>14</sup>銅細工人のアレキサンデルが私をひどく苦しめました。そのしわざに応じて主が彼に報いられます。<sup>15</sup>あなたも彼を警戒しなさい。彼は私たちのことばに激しく逆らつたからです。』このアレキサンデルという反対者、迫害者については、**第一テモテ 1 : 20**にも出てきます。パウロをひどく苦しめた者。ここでは激しく逆らつた者というふうに出ています。同労者ではないわけです。でも、ここでのパウロの対応に注目して下さい。「そのしわざに応じて主が彼に報いられます。」パウロが報いているんじゃないです。主が報いると言われています。パウロは**詩篇 62 : 12**を引用しています。聖書に従つて処置しています。ひどく苦しめる者に対して、激しく逆らう者に対して、私たちも同じことをしなくてははいけません。聖書に基づいて、聖書に従つて対応する、処置するということです。で、最後に主に裁きをゆだね

るということです。詩篇 62 : 12 それが引用されていますけれども、皆さんの新改訳聖書、引照付であれば是非その下のところを見て頂きたいと思います。『あなたは、そのしわざに応じて、人に報いられます。』

“しわざ”というところに小さな 2 と書いてあります。脚注を見て頂くと、そこにはローマ 2 : 6、第一コリント 3 : 8 そしてテキストの第二テモテ 4 : 14、3カ所新約聖書から。これは全部パウロの書簡です。パウロは詩篇 62 : 12 を常に意識していたということが分かります。ローマ 2 : 6 は第二テモテ 4 : 14 と同じような使い方をしてしています。引用の仕方も同じです。第一コリント 3 : 8 は、そちらはクリスチャンのいわゆる報いを算定する裁き、クリスチャンもその仕業、その地上の働きに応じて報われる。罪定めではなくて、義の栄冠の報いとして、裁かれるということが書いてあります。ですから、クリスチャンの裁きとノンクリスチャンの裁き、両方に使われているということが分かります。クリスチャンだろうと、ノンクリスチャンだろうと、地上の生涯、その行動、仕業に応じて裁かれる。これは共通しているわけです。残念ながら良い行いをもって人も人は救われません。イエス・キリストを信じる信仰だけが人を救う。天国に私たちを入れるものとなるわけですが。ですから、どんなに良い行いを積んでも、徳を積んでも、善行を積んでも、慈善活動に勤しもうと、どんな大金を寄付しようと、イエス・キリストを信じていなければ、社会貢献がどうであれ、歴史に名を残すような偉業を成し遂げても、4,000 本安打を打ったとしても、天国には行けないんです。残念ですけども。イエス・キリストを信じる信仰だけが私たちを天国に誘うものです。でも、イエスを信じない者もその仕業に応じて裁きを受ける。地獄でも実は裁きの度合いがあるんです。ですからどうせ信じないなら、あまり悪いことはしない方がいいと思います。もちろんそんなアドバイスはするつもりはありませんけれども。イエスを信じて欲しいと思います。でも、天国にも報いがあるように、地獄にも報いがあるんです。これについて今詳しく話す事はいたしません。もっと大きな罪があるという言い方をイエスがなさいます。知ってて行うならば、もっと重い罪がある。サンヘドリンの議員たち、パリサイ人、律法学者、祭司たちにはもっと大きな罪があると、イエスは言いました。同じ罪でも度合いがある。地獄にも裁きの、苦しみの、責めの度合いがあるということ。恐ろしいですけども、これが事実です。ですから私たちはどちらか一方を選ぶわけです。ガラテヤの 6 章、そこにもこう書いてあります。その概念を言い表していますから、読みますから聞いて下さい。ガラテヤ 6 : 7 『思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。8 自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。9 善を行なうのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。10 ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行ないましょう。』自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取ると。ノンクリスチャンも刈り取るんです。で、クリスチャンも御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取ります。でも、クリスチャンでも肉のために蒔く者は、木や草やわらと一緒にそれは灰になるだけです。後で後悔して、泣いて歯ぎしりするだけです。でも、天国に行ったらもう涙は拭われるとあります。天国に行ったら涙は拭われるという事は、涙していると言うことです。天国に行く前に泣いているんです。何を泣いているか。もっとああしておけば良かった。チャンスがあったのに、機会があったのに。御言葉を学ぶ機会があったのに、御言葉を宣べ伝える機会があったのに、信仰の家族に善を行う機会があったのに、それをしなかった。無駄にした。泣くんです。多分皆さんが今まで経験したこともないような後悔だと思います。でも天国に行ったらその涙は拭われると黙示録に書いてあります。泣かない方が良いに決まっています。そのために私たちは今地上に置かれているんですけども、ノンクリスチャンも必ずその仕業に応じて報われる。アレキサンデルのしたこともその仕業において報われる。「罪から来る報酬は死です。」と、ローマ 6 : 23 に書いてあります。ちゃんと褒賞があるんです。報いがノンクリスチャンにもあるんです。クリスチャンにもあれば、ノンクリスチャンにもある。どちらかを私たちは選ぶんです。永遠の命か、永遠の

死か。どちらかです。で、パウロはそのようにして自分に対してひどく苦しめる人たち、自分に対して激しく逆らう者たちの呪いを祈ったんじゃないです。裁きを祈ったんじゃないです。イエスは迫害する者のために祈りなさい、と言われていました。パウロがやっていることは、呪いを祈っているんじゃないで、願っているんじゃないで、主の裁きを求めているだけです。本当にアレキサンデルが悔い改めればそれもよし。悔い改めなければ、それもまた彼の身に降りかかることであると。

で、16節。テキストに戻って下さい。『私の最初の弁明の際には、私を支持する者はだれもなく、みな私を見捨ててしまいました。どうか、彼らがそのためにさばかれることのあるように。』パウロは自分を見捨てた者たちのために許しを乞うています。彼らが裁かれないように。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分で分からないのです。」イエスの祈りを思い出します。

で、17節で『しかし、主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。私はししの口から助け出されました。』この「しかし、主は」という言葉は、いつも私の心を励ますもの、暖めるものとなります。奮い立たせるものとなります。「しかし、主は」。皆が皆誰もがあなたを見捨てても、「しかし、主は」。あなたはひとりぼっちじゃありません。「しかし、主は」。支持者もサポーターも誰もいない。「しかし、主は」。見捨てられても、孤独感を抱いても。「しかし、主は」。自分だけじゃない。自分一人じゃないんです。でもそういう時にこそ、あなたはイエスが本当に近くに居て下さる、共に居て下さるということを、他のいかなる時よりも強く感じる事が出来ます。イエスの臨在のリアリティ、現実をひとりぼっちと思うその時にこそ、他のどの時よりも強く感じられる。現実的に感じられる。リアルに迫ってくる。皆あなたを見捨てました。その時に本当にイエスが自分と一緒に居るんだということを、大勢の人に囲まれているその時よりも、教会の中で皆で賛美しているその時よりも強く感じる事が出来る。そういう瞬間があるということです。ひとりぼっちで居るとい時です。今は獄中に居ます。凶悪犯と鎖で繋がれている状態です。でも彼は、パウロは一切不平不満を漏らしていません。キリストの名において為したことなのに、ただ御言葉を宣べ伝えただけなのに、どうして私はこんな目に、こんな理不尽な目に遭わなきゃいけないのか。しかも皆が皆見捨ててしまった。同じ刑に服したくないから。同じように罰せられたくないから。皆逃げてしまった。ルカは一緒にいましたけれども。イエスもそうでした。弟子のヨハネだけです、十字架の足元にいたのは。全員が全員、女弟子を除いては。男弟子はヨハネだけ。皆見捨てたわけです。皆イエスを見放したわけです。でも、パウロは一切愚痴をこぼしていません。むしろ祈っています。そしてむしろ感謝をしています。主と共に居て下さる。そして私を通して神の御言葉が余すところなく語られる事。そのことを祈り求めています。それはパウロの書く書簡も、このテモテへの手紙もそうです。また囚人仲間に対して、看守に対しても、パウロを通して神の御言葉が余すところなく語られる。すべての国の人々が救われるため、とは書いてありません。すべての国の人々が御言葉を聞くようになるため、とあります。この違いにも注目して下さい。すべての人が救われるため、ではなく、すべての人が御言葉を聞くようになるためです。救うのは神の働き。私たち人間の働きじゃありません。私たちの働きは御言葉を余すところなく語ることが、私たちの働きであり、私たちの地上生涯の目的であります。時が良くても悪くても人を救いなさい、とは書いてありません。御言葉を宣べ伝えなさい。だからいつまでも人が救われなくても、がっかりしないで下さい。苛立たないで下さい。あなたの仕事は御言葉を余すところなく語ることです。時が良くても悪くても語り続けるということです。たとえ獄中に居てもです。たとえ死を目前にしてもです。『私はししの口から助け出されました。』“ししの口”ライオンの口です。文字通りライオンにクリスチャンは餌としてコロッセオで見世物にされて、食われたと。引きちぎられたり、餌食になったということもありました。それから守られたというふうにも解することは出来ますし、サタンは獅子と呼ばれています。吠えたける獅子。そのサタンからも助けられたというふうにも見る事が出来

ます。

でも 18 節を見て下さい。『主は私を、すべての悪のわざから助け出し、天の御国に救い入れてくださいます。主に、御栄えがとこしえにありますように。アーメン。』とありますが、“悪のわざ”から助け出されるとありますが、でも結果的にパウロはネロによって捕らえられて、投獄されて、そして首をはねられて死んじゃうじゃないですか。悪のわざ”から助け出されていないじゃないですかと。もう死を覚悟しているのにどうして助け出されたなんていうことをパウロは言っているんですか。「ししの口から助け出された。」なんて言っているんですか、と思うかもしれませんが、迫害を受けること、投獄されること、拘束されること、首をはねられること、殉教すること、それは全て悪いわざじゃないんです。迫害を受けると「あっ、悪いわざだ。」と思うかもしれませんが。投獄されたり、鎖でつながれたら「あっ、悪いわざだ。」と思うかもしれませんが。殺される。「これは、悪いわざだ。」と思うかもしれませんが。でも、それは悪いわざじゃないんです。マタイ 5 : 10~12 にはイエスの言葉としてこう書かれています。山上の垂訓、八福の教えです。『<sup>10</sup>義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。<sup>11</sup>わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。<sup>12</sup>喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。』迫害されたらそれは悪いわざではなくて、良いわざだということです。天の報いは大きいから。ですからパウロは迫害されたら、きっと笑っていたと思います。ヘラヘラと笑っていたのではなくて、シメシメと思ったかもしれません。うっしっしと思ったかもしれません。来たなど。待ってましたと。まあ、そのように彼は思ったのかもしれませんが。幸いだと。

で、19 節『プリスカとアクラによろしく。』“プリスカ”というのは“プリスキラ”とも言います。夫婦です。妻がプリスカ、夫がアクラです。“プリスカ”は「古代、古い」。おばあちゃんというイメージですがけれども。“アクラ”は「<sup>おと</sup>驚、イーグル」です。常にこの夫婦はパウロの片腕として宣教旅行にも同行し、そして自宅を常に開放していました。パウロと同じ天幕職人です。テント作りをしていた、テントメーカーです。で、そのようにして夫婦でパウロを支えた良き働き人。彼らのことも使徒 18 章、ローマ 16 章、第一コリント 16 章にも見ることが出来ます。そこを見て頂くと 2 人の名前を見ることが出来ます。夫婦単位でも主に仕えたわけです。

で、『オネシポロの家族』家族単位でも主に仕えていました。家族総出で、パウロの元を訪れたという事はこの第二テモテ 1 : 16 ~18 に出ています。『オネシポロの家族』です。家族で四人のパウロの元を訪問して、慰問してくれたわけです。励ましてくれたわけです。“オネシポロ”の意味は「益をもたらす」。

で、20 節に出てくる“エラスト”『エラストはコリントにとどまり』とありますが、“エラスト”はローマ 16 : 23 のコリントの収入役のエラストと同一人物と思われます。使徒 19 : 22 にも出てきます。マケドニアというところではテモテに協力しています。社会的地位のある人物です。町の収入役です。ですから金融庁の長官とか、財政の担当だったということです。“エラスト”の意味は「愛する者」

で、『トロピモは病気のためにミレトに残して来ました。』とあります。“トロピモ”というのは病気になっているんですが、名前の意味は皮肉に聞こえるかもしれませんがけれども「栄養のある、滋養に富む」という意味です。彼の名前も使徒 20 : 4、ならびに使徒 21 : 29。パウロに同行してエルサレムに行ったんですけども、そこで病気になってミレトに残して来たということになっています。パウロは不治の病の病人も奇跡的に癒すことも出来ました。にもかかわらず同労者のトロピモを癒す事は出来なかったんです。癒す力を持っていても、癒しの賜物があっても癒せなかった。そういう事例があるわけです。で、パウロ自身も不治の病を抱えていたことは皆さんも承知の通りです。第二コリント 12 章では肉体の棘<sup>とげ</sup>と言われて、パウロは三度も祈ったけれども、その棘は癒されなかった。でも、弱い時にこそ強いと。弱さのうちにキリストの力が完全に現れるということを主から言われて、パウロは肉体の棘を受け入れたわけです。ガラ

テヤ 4 : 13~15 では、その肉体の棘がパウロにどんな影響を与えたのか。目が不自由で、弱視だったということも言われています。パウロも癒されなかった。で、パウロの愛する息子テモテも癒されなかったんです。彼は胃が弱かった。胃弱だったわけです。虚弱体質。第一テモテ 5 : 23 にそのことが触れられております。「これからは水ばかりではなく、ぶどう酒も飲みなさい。」それは、酒を飲めと言っているのではなくて、当時の胃腸薬を飲みなさいと言っているわけです。祈っても癒されなければ、薬を使いなさい。薬を使う事は、医者に頼ること、医療に頼る事は不信仰ではないんです。神が医療もつくり、医療を使うわけです。医者も、看護師も、薬も、神がそれを癒しのわざに手段として使うだけであります。癒すのは主です。奇跡的に癒すことも出来ますし、自然治癒という肉体にすでにプログラムされたそれぞれの自然治癒力を使っても癒されますし、また薬や医療行為を使って、医者を使っても癒すことも神様はなさいます。ですから、「病院に行く事は不信仰だ。すぐに薬を飲む事は不信仰だ。」というのはまったく的外れです。信仰がないから癒されない、そんなのはまったく非聖書的な話です。エパフロデトという人物もパウロの片腕ですが、彼も病気でパウロは癒すことは出来なかったんです。ピリピ 2 : 25~30 に出てきます。トロピモにしても、テモテにしても、エパフロデトにしても、神の立派な働き人です。神の立派な働き人、神の人と呼ばれる人でも病気になるんです。テモテは虚弱体質です。パウロももちろん病気持ち。持病を持っていたわけです。大病を患って、その働きが続けられなくなることもあったわけです。トロピモもそうです。エパフロデトもそうです。ですからそういうことも予期して下さい。クリスチャンなのに病気になる。クリスチャンなのに大病を患う。クリスチャンなのに奇跡的に癒されない。胃薬を飲まなきゃいけない。病院に行かなきゃいけない。休養しなきゃいけない。静養しなきゃいけない。ミレトに残らなければいけない。あることです。ですから、何かサタンが働いているとか、不信仰だからとか、常にネガティブに捉えないで下さい。全部否定的に捉えないで下さい。もちろんあなたが、主が癒されることを信じていないならばそれは不信仰です。祈る前に、考える前に、すぐに「もう薬を飲もう。」とか、祈る前にすぐに「病院に行こう。」とか、それは不信仰です。祈って病院に行ってください。祈って薬を飲んで下さい。もちろん薬を飲まなくても癒されることもありますから、それも信じて下さい。医者に行かなくても癒されることもあります。

で、21 節。『何とかして、冬になる前に来てください。』冬になったら地中海では嵐がおきます。パウロもこの時嵐に見舞われたこともあったので、「冬になる前に来てください。」船はもう出港しませんので、冬になる前に来てもらわないと上着も届けられない、聖書も届けられないということになってしまいますから、「冬になる前に来てください。」とアドバイスしているわけです。快適に御言葉を学ぶ。冬に暖房がある。夏には冷房がある。教会の施設、それは御言葉を学ぶために快適でなければいけないということも、私はここから教えられます。「安普請の掘っ建て小屋でもいいんです。」雨風しのげればそれでいいと思うかもしれません。でも、御言葉を心ゆくまで学べる。それを目指すべきだということです。「上着なんか贅沢だから、聖書だけでいいです。」とは言わなかったんです。「上着も持ってきてくれ。」と、このことも考えて下さい。贅沢なものは要らない。でも、最低限の物でも心ゆくまで。もしここに冷房がなかったら、2 時間は私は話せません。20 分で終わると思います。ここに暖房がなかったら、冬なんかとても長くはここに留まれません。上着があるからです。暖房の施設、冷房の設備があるからです。屋根があるからです。忘れないで下さい。すべての目的は神の御言葉を学ぶためです。そしてそれを宣べ伝えるためです。そのために出来ることはすべてやるべきだということです。贅沢とか、この世的だとか、そういうことではないということです。

で、21 節にはまた名前が挙げられて『ユブロ、プデス、リノス、クラウドヤ、』ユブロは「慎重になる、分別がある」という意味です。プデスは「控えめ、慎み深い」。似ている名前です。リノスは「網、ネット」という意味です。クラウドヤ、女性です。名前の意味は「不自由」足が動かない時に使う言葉です。かわ

いそうな名前ですけれども。でも、キリストにあつて彼女は自由です。男性の名前があれば、女性の名前もある。夫婦の名前もあれば、家族の名前もある。いろんな人たちが神に用いられるということを知って下さい。『すべての兄弟たち』名前も挙げられてませんが、無名の人たちも。パウロは独身でした。かつて結婚していましたが、何らかの理由で妻とは離れました。おそらく死別したか、離婚したかです。ユダヤ教の妻は、キリスト教徒になったパウロを見捨てたかもしれませんし、死別したかもしれません。何れにしてもパウロは、一人で旅をしていたわけですが、でも彼には大勢の仲間たち、同労者たち、主にある兄弟姉妹、家族がいたわけです。親密で永遠に続く友情があつたわけです。最後の手紙にこんなに沢山の名前が出て来ています。皆さんはどうでしょうか。最後の時、皆さんも沢山の人が頭の中に思い浮かぶでしょうか。最後の言葉を残す時、永遠の友情を持つて人たちが何人いるでしょうか。あなたに指導と説明義務と励ましを与えてくれる良き助言者、または教師がいるでしょうか。アクラやプリスカのように非常時にあなたのために祈ってくれる、あなたを愛してあなたを支えてくれる仲間があるでしょうか。テモテのような人、すなわちあなたが助け、あなたが励まし、そしてあなたが訓練している若い指導者はあるでしょうか。最後の時、パウロのような友達を皆あなたは思い浮かべて、そして彼らに言葉を残していくことが出来るでしょうか。そういう人たちにあなたは取り囲まれているでしょうか。「そんな人は一人もいません。」と言うならば、あなたのクリスチャンの歩みは歪んでいると思います。間違っていると思います。「私は孤軍奮闘するだけです。孤高の人です。」格好つけしないで下さい。クリスチャンは羊ですから、一人では、1匹では生きていけない。群れないと生きていけないわけです。一人では信仰生活を全う出来ないんです。いつもあなたは誰かの助け、指導が必要です。励ましが必要です。だからある人たちのように集まることをやめたりしてはいけません。いつも集まるべきです。そしてそこに信頼出来る仲間、信用出来る人たち、愛すべき人たち、支えとなってくれている人たち、大勢なければいけないんです。

で、最後に 22 節。『主があなたの霊とともにおられますように。恵みが、あなたがたとともにありますように。』「主」というところには、主イエス・キリストと付くものもあります。写本によって、公認本文では「主イエス・キリスト」と書いてあります。「主イエス・キリストがあなたの霊とともにおられますように。」テモテの霊とともにおられますように。テモテの霊、時に彼は困難があると、エペソ教会でトラブルがあつたり、人間関係で困ったりすると、臆病の霊にかかってしまったわけです。取り憑かれたかのように。第二テモテ 1:7 に『神が私たちに与えて下さったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。』と。おくびょうの霊の時に、イエス・キリストが共に居て下さるならば、全て力と愛と慎みとの霊で満たされるわけです。私たちに必要なのはイエス・キリストであります。

で、最後は『恵みが、あなたがたとともにありますように。』これはパウロのいつもの挨拶と思うかもしれませんが、確かにいつもの挨拶、締めくくりの言葉ですが、でもこれは本当に最後の最後の言葉なんです。地上で最後に書き残した言葉。それがやはり恵みなんです。最後の最後もやっぱり恵みなんです。最後だからちょっと違った言い回しでとか思わなかったんです。ちょっと最後ぐらいは、もうちょっとオリジナリティをつけてとか、もうちょっと美辞麗句を並べたてとか、そんなことを一切考えずにシンプルに、最後も同じです。『恵みが、あなたがたとともにありますように。』どの手紙もそうですが、最後の手紙も変わらないわけです。これが 1 番大事だと。最後のパウロの最後の最後の締めくくりの言葉、それは恵みです。分不相応な者に与えられる過分な親切。当然受けるべきでない者が受けるもの。受けるに値しない者が受けるもの。それが全部恵みです。恵み。最後は恵みです。恵みがすべてだとパウロは、最後の最後までそのことを言い続け、それを言い換えることもしませんでしたし、それをやめてしまうこともなく、最後の最後まで同じメッセージを語り続けました。

で、今日で第二テモテの学びを終えて、パウロ最後の手紙を皆さんと一緒に終えたんですけれども、是

非これは地上を去る最後の言葉。キリスト教の歴史の中で最も偉大な人物の残した言葉です。イエスを除いて、パウロはその後に続くと思います。イチローも偉大な選手だと思います。私も尊敬していますけれども。でも、イチローの言葉なんかよりも、比べ物にならない位パウロの言葉には重みがあるということ。イチローの功績よりも、比べ物にならない位パウロの功績の方がはるかに大きい、重い、そして価値があるということです。皆さんが尊敬してやまないあの人ことを思い出して下さい。もしその人が最後にあなたに何か語るとするならば、あなたは一言も漏らすまいと思って聞くとします。一生これを握り締めて、一生忘れまいと。命の恩人の言葉ならば、最も尊敬する人の言葉ならば、と思うとします。パウロの言葉は、その人以上だということを知って下さい。あなたがパウロ以外の人で尊敬していると思うかもしれませんが。パウロ以上のことをした人は、私はこの地上には知りません。イエスを除いては。でも、是非そのようにこの言葉を受け止めて下さい。すべてのクリスチャンは、牧会書簡と呼ばれる**テモテへの手紙**、**テトスへの手紙**を学ぶべきです。ミニストリーに携わる人は、全員が全員学ぶべきですが、その最後の最後の言葉。それが**第二テモテへの手紙**ですから、これは私にとっても非常に大きな意味のある大切な手紙です。神の働き人、神の人として生きていくためには必要な言葉です。ですからここから離れないで下さい。これをいつも思って下さい。パウロの頭にあった事は、義の栄冠です。義の栄冠、頭から離れなかったんです。義の栄冠が文字通り永遠に頭から離れない日がやって来ます。でも、それも恵みだということで、**黙示録**にはその与えられた冠をイエスの足元に投げ出すということをクリスチャンはするんです。折角頂いたものをイエスの足元に投げ出すんです。なぜそうするか。私がしたからではない。全部イエスがして下さったから。本当に私が受けるべきものじゃない。これはイエスにこそ与えられるものだと。全部イエスにお返しします。たくさん冠があるほど、たくさんお返し出来るんです。たくさん礼拝出来るんです。それが天における報いです。冠がたくさんあればあるほど、それだけイエスに栄光を帰すことが出来る。それだけイエスを礼拝出来る。少なければそれまで。その程度。残念ですけども。浅いということです。豊かでないということです。礼拝はこの地上でも行えますが、天で行うべきもの、天で行われる御心を、地上でも私たちが行っているに過ぎません。ですから、地上で礼拝をおろそかにする人は、天で礼拝をそれほど大事にしていけないということですから、その程度の天国生活しか望めないということです。このこともこれからの皆さんの礼拝生活、地上生活に於いて永遠にそれが価値のあるものとなっていく。永遠に繋がっていくものとなっていく。だからこそ私たちはひとつひとつ吟味しながら大事にしていくのであります。

では、これで本当に終わりにしなくてはいけないので、終わりにしたいと思います。